
白月に涙叫を

善輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白月に涙叫を

【Nコード】

N6360U

【作者名】

善輝

【あらすじ】

与えられた役割、その為の力を受け止め、愛する人に着き従う青年
苦痛の運命に翻弄されながら、課せられた宿命の路を歩む少女

二人の男女の、月夜に織りなすハイファンタジーラブストーリー

序章 白と瓦礫 (前書き)

はじめまして、義輝と申します。

まだまだ至らぬ若輩者ですが、楽しんで読んでいただけたらと思います。

作中では多少のグロ描写、微エロ(多分)が混在すると思われるので、その点を留意していただけたらと思います。

誤字・脱字等ありましたら遠慮なく指摘していただけるとありがたいです。

それでは、この作品が貴方の心に少しばかりでも残らんことを願っています。

序章 白と瓦礫

貴方のことばに、私は笑った

貴方の言葉に、私は涙した

貴方のコトバに、私はまた泣いて、でも、笑うことができた

青年は少女を抱いて座っていた。

冷たい瓦礫の上、温もりのない月明かりの下。硝煙すら上がり疲れた戦災の跡地。命すらも時すらも凍りついたその場所で、青年は眉一つ動かさず、腕の中で瞳を閉じる白雪のような少女を見つめていた。

肌も髪も服も全てが、青空を泳ぐ雲や降り積もった新雪のように真白く、美しく整った顔に儂さを添える。荒廃した周囲の情景に比べ、少女は不自然な程に美し過ぎた。煤の一つもついていない、それは彼女を抱く青年の尽力によるものであった。

はじめは恩と恨み。そして誓い。さらにはまごうことなき、唯一の

愛がそこにはあった。

- - 愛。彼女には、ちゃんと届いて居ただろうか - -

そう考え、青年は口を開きかけるが、直ぐに言葉を呑み込んだ。

少女の目は開かない。彼女はずっと、目を閉じたままだ。青年は開くのを強要しようとはしない。開くのも閉じるのも、全ては彼女の意志。彼女の意志を何よりも優先する、それが青年の誓いでありまた愛であった。

「いつまでそうしているつもりだ？」

近づいて来る足音と、芯のある強い女声に青年はゆっくりと顔を上げた。

- - 自分の鼓動以外を聞いたのは久しぶりだ - - そんなことを思いながら。

視界に写ったのは一組の男女。

どちらもよく見知った顔馴染みであったが、青年はその来訪者に何ら感情も抱けなかった。

「何の用ですか」

抑揚のない声で青年は問う。

「先月廃墟になったある街に何隊かの先遣隊が派遣された。だが、その何れもが街に着いたと思われる頃に音信不通になっているらしくてな」

「その調査に貴女が派遣されたと？」

問いに答えた金の髪の女性の後を青年が引き継ぐ。女性は表情を変えず無言でそれに肯定と答えた。

青年は鼻で笑い、一度腕の中の少女に視線を落として、再度女性とその隣の少年を見据える。

「貴女が調査の為だけにその姿で現れ、尚且つ騎士団長代理まで引き連れて来たと？」

そんな馬鹿な話はない、と青年は言外に付け加えて言葉を切る。元従盾騎士と呼ばれた少年が一步、青年の方へと歩み寄った。

「俺達の任務は先遣隊失踪の原因究明とその要因の排除だ。お前がここを去ってくれば、それで済む。……わかってんだろ？ ここに居たって、何も変わらない。なあ……チアキ」

「黙れ」

青年が突如無だった感情を、燃え盛る憤怒に色を変えて少年を睨んだ。その眼には、目の前の少年と女性、その向こうのモノへの憎悪の焰が宿っていた。

「その名前と呼んでいいのは彼女だけだ。……ここへ居たいと言ったのは彼女だ。彼女が動くと言っまで、僕はここにいる。彼女が選んだ彼女の居場所を僕は守る」

そう言って、青年は少女を静かに瓦礫の上に横たわらせ、立ち上が

る。

「何処かの誰かが選んだのを良い事に、利用するだけ利用して、苦しめるだけ苦しめて。背けば反逆だと貶めて、辿り着いた居場所さえ奪って……。貴様らにわかるのか。彼女が流した涙の数が！引き裂かれた心の痛みが！」

青年の瞳はもはや眼前の二人など見てはいなかった。見えているのは彼らの向こう側。少女からあらゆるモノを奪った、巨大な存在。

「誰であろうと容赦はしない。彼女を苦しめようとするモノ、彼女から何かを奪おうとする存在全て！この僕が喰らい尽くす！」

白き月の下で、一人の青年が叫ぶ。それは、涙を咬み殺した哀しみの叫び……。。

鍵乙女 デビューナー

一台の馬車が野道を走っている。昼下がりの穏やかな春陽に包まれたその道は、森に出来た獣道のように、幾多の人々がそこを通過していったが故に作られた名もなき路。

いつから使われ、誰が初めに通ったのか誰も知らない、けれど、行商人や旅人達の足跡が築き上げてきたものだということだけは語らずともわかることだった。

「オルヴス、まだ着かないの？」

馬車の中から少女が気だるそうな声で、騎手の青年へ問う。

「後小一時間と言ったところでしょうか。この辺りはのどかで、馬もあまり急ぎたがらないようですよ」

姿を見せない声の主の方へ律儀に顔を向けながら、オルヴスと呼ばれた青年はにこやかに答えた。

首が隠れ、目にかかる程度の長さの黒髪に、七分くらいまで捲りあげた白いカッターシャツと黒のベルボトム。

一見で騎手ではないことは誰の目にも明らかであるが、その実、青年は馬の機微もわかるようで、その姿は半ば不可思議にも見える。

「あなた、私と馬とどっちが優先なのよ」

倦怠感に苛立ちを少々加えた声音で少女がまた青年に聞いた。

「そう焦らなくとも大丈夫ですよ。ああ、もしかして“お花摘み”」

ですか？」

「違うわよっ。疲れたの。お腹空いたわ」

不本意なところを指摘されたようで、少女の声は少し捲し立てる様に言葉を次ぐ。

オルヴスはその様子が目に浮かんでいるようで、口元を緩めていた。

「先程の村で作ってきたサンドイッチが荷物の中に入っていたと思います」

先程とは言っても、村を出たのが日も昇る間際の薄暗い時間だったが。

「もう食べた」

「僕の方は」

「……そんなもの最初からなかったわ」

不遜にもそう口にする少女の言葉を、オルヴスは端息混じりに仕方がないと思い、反論はしなかった。

その、なんだか諦められたというか若干呆れたかのような雰囲気を感じ取ったのか、少女の声が弁明しはじめる。

「し、しょうがないじゃない。だってあなたに起こされて直ぐ馬車に乗ったし、乗ってからはずっと寝てて何も食べてなかったし……アンバタだったし」

最後の言葉だけほんの少し上気したようで、またオルヴスは微笑ん

だ。彼自身は騎手をしながら食事を摂るつもりがなかったので、早朝作ってきたサンドイッチは全て彼女の好物のアンバタにしてきたわけだが、それが功を奏したようである。

「全く。あんまり甘いものばかり食べていると虫歯になりますよ」

とはいえ、一応釘は刺すらしい。

「子供扱いしないで。あなたより二つ年上なんだから」

はいはい、とオルヴスは流して馬へ軽く鞭を打った。のんびり散歩気分で歩かせてやりたい所だが、主人はあの様子だし、街は近いので少しばかり頑張ってもらおうとの思惑だ。

大樹の街セパンタ。古くから末端の村々への交易の拠点として栄えてきた街である。故に街とは言っても、都会然とした、石や鉄などの建築物、整備された広い通り等といった物は存在せず、建物の殆どは木造で背も低く、通りは狭い道が幾重にも重なる網の目のようなものである。それでも東西南北に一直線に伸びる十字路兼街の出入り口と、一回りするのにも一日はかかると言われる広さが「街」としての名目を保っているとも言おうか。

そんなセパンタの西門に、オルヴスが引く馬車はようやく辿り着いた。

「アノ様着きましたよ」

馬車を降り、後ろの荷車へと声をかける。少しして、幌の中から一人の少女が現れた。背中まである艶やかで乱れない水色の髪を、両側面から後頭部にかけてまとめ、後ろで一つに結んでいる。日差しに溶けてしまいそうな真珠の肌と凜とした顔立ちで、服装は華美でもない白のワンピースなのにどんな造形にも見劣りしないと思われる程。

「さて、街へ入りまじょうか。この時間なら宿も取れるでしょう」

言いながらオルヴスは手を差し出す。アノと呼ばれた少女は慣れた手つきでその手を取ると、ゆっくりと地面に降りた。

「そうね。ずっと動いてなかったから足が重たいわ」

また眠っていたのだろう。まだ少し眠気が覚めきっていない藤色の眼を擦ってそう告げた。言葉を受けてオルヴスは馬車から荷物を取り出して肩に背負い、馬の手綱を引いて馬車止めに連れて行く。馬車を繋いで戻る際、オルヴスは思い出したように荷車の中に入って中から白い布のようなものを持ってきた。

「忘れてました。大きな街ですし、念の為」

白い布、それは薄手のフードで、少女の頭をすっぽり覆い、目深に被れば顔が見難いように出来ているものだった。

「失礼しますよ」

一言告げてからアノの頭にそれを被せ、紐を結ぶ。

「これ、視界が悪くなるのだけど」

「僕があなたの眼になりますから大丈夫ですよ」

「そうじゃないんだけど……」

アノは以前にもこのフードを被る事を何度か嫌がっており、「幼く見える」だの「今日の服に合わない」だの「あからさまに隠してるって感じが嫌」だの理由をつけるのだが、悉くオルヴスに一蹴されていた。

その経験もあるので逐一アノも食い下がらない。最初から二言三言文句を呟くくらいで、抵抗と呼べるようなことなんて事はないのだが。

「そろそろ参りましょうか。衛兵がアノ様の美貌を見ようとフードの下に目を光らせてますから」

冗談なのか本気なのか、オルヴスは門を警備する衛兵の方へ指を差して微笑むと荷物を持ち上げて歩き出した。

「ばつ馬鹿じゃないの？ そんなことあるわけないじゃないっ」

フードの下の頬を少し赤く染めて反論しながらアノがオルヴスの後へ続く。

そんな毎度毎度のやり取りを終えて、ようやく二人はセパンタの街へと足を踏み入れた。

オルヴスはここセパンタに何度か足を運んでいる為、複雑な街並み

も大体は覚えている。その足取りは迷う事なく、宿のある方向へと歩を進めていた。余談だが、毎回共に来ている筈のアノが全く道順を覚えていない様子で、オルヴスの一歩後ろを着いて来ているのはご愛嬌である。

「相変わらずここは賑やかですねえ」

「こつというのは騒がしいって言うのよ」

オルヴスの感想に苦言を呈し、アノはふと顔を上げた。

何やら美味しそうな匂いが何処からか流れて来ている。それに誘われるように首を巡らせた。

目に止まったのは一見の酒場らしき店。店内は少々薄暗いが、街道の露店や商人、客らの声に紛れて男女含めた笑い声が聞こえてくる。時刻はまだ夕方といったところだが、店自体はやっているらしい。

と、アノはそこまで考えてお腹の辺りの違和感に身体を強張らせる。だがそれは彼女も経験則からわかる通り、無駄な抵抗であった。胃の辺りから伝わる音の振動に、フードの下の顔を林檎のように染めながらオルヴスの隣をそそくさと通り過ぎようとす。彼と肩がすれ違つとほぼ同時にとぼけた声が彼女の耳に届いた。

「美味しそうな香りですねえ。これは、香草焼きか何かでしょうか」

アノの肩が跳ねるように反応したが、足だけ止めて振りかえらない。

「少し早いです、夕飯、食べて行かれますか？」

「なっ、何でよ？」

平静を装ったつもりだろうが、本人は声が少し上ずっている事に気づかない。オルヴスは知らぬ顔で言葉と続けた。

「いえ……お腹が空いたと馬車でも仰ってましたし。……“事”の後だと食べられないでしょう」

後半の台詞にアノが先刻とはまた違った肩の強張りを見せる。目を伏せ、深く息を吐き、そうしてから彼女は少し固い表情で顔を上げた。

「そうですね。行きましょう。オルヴス、荷物は大丈夫？」

「はい、お任せください。僕も少々空腹だったもので」

「そう」

対照的に柔らかな笑みを浮かべながら、従者はスタスタと進む主の後を着いて行く。

開け放たれたままの扉をくぐると、店内の喧騒がよりはつきりと聞えた。

アノは迷わずカウンターの一番店奥の席に座り、その隣をオルヴスが着く。少しして、カウンターの店主らしき人物が二人にグラスの水を運んできた。

「いらっしやませ」

「少しばかり空腹を満たしたいのですが、そのような料理もありますか？」

席には品書きがなく、さりげなく店内を見回す少女を尻目にオルヴスが率先してそう問う。

「ここは旅の方も多く立ち寄られますので。まかないのようなものになります。味は保障致しますよ」

チラリ、とアノの方へ視線を向けて許可を取る。当の彼女はどうでもいい、というように視線を逸らしグラスの水を傾けた。

文句ならすぐに飛んでくる。無言なのは、無視ではなく肯定。

そんな素直じゃないやり取りをして、従者は再び店主へと視線を戻す。

「香草焼きはありますか？ 香りに引かれて立ち寄ったのですが」

「ええ。十分程お時間頂きますがよろしいですか？」

「二人分お願いします。あ、それとブレッドを二つずつ」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を受け取り、店の奥へ行く店主。早々にアノのグラスの中身が空になり、見計らったようにウェイトレスが水筒を持って現れる。

「お二人とも旅の方ですよ。いい時期にいらっしやいましたね」

水を注ぎながらそう口にする。店主が旅の人間もよく立ち寄ると言っていたし、店員である彼女もその辺りの目は養われているのだから。

「いい時期、という事は何かあるのですか？」

「鍵乙女デヒューナーがいらっしやるんですよ！ 教会の神父様のお話だと、もう近くまで来ているんじゃないかとの事です」

・鍵乙女デヒューナー。世界に五つあるという「門」を開閉する唯一無二の力を持ち、その力であらゆる災厄から人々を護ると言われる神の使い。アヴェンシス教会の庇護の元にあり、その役目の為に命を賭している。

「おや……教会は鍵乙女の動向は秘匿している筈では？」

鍵乙女無くして世界に平穏は無く、それ故にその存在はあらゆる存在から狙われてしまう。それは時に野盗であり、何処かの富豪でありまた国である。だから、教会は鍵乙女の存在は公表したとしても行動・居場所に関わる情報は出さないのだが。

「少し前にここに来た旅の方が言っていたんです。ちょうどその時街の中にフェルが入って来ていたんですけど、その方がお一人で倒してくれまして。その方が去り際に、もうすぐ鍵乙女が門を開くから大丈夫って」

一通り話を聞き終え、オルヴスはグラスの水を飲み干し、一瞬だけアノの方へ目をやる。

平静を装っているようだが、少し肩を落としフードの中に手を当てて額を抑えているようだった。

「にしても街中にフェルが侵入なんて、危なかったですね」

フェルとは、全ての命ある存在に仇なす魔物の事。個々によるが、物によっては単体で一国を滅ぼすまでの力があるとされている存在だ。

「はい……あの時は運がよかったです。あんな腕の立つ剣士さん始めて見ました。って、それはもう良いんですよ。だって鍵乙女様がいらっしやったらフェルの心配なんて要らないじゃないですか」

鍵乙女が門に触れるとフェルが消える。

これは民衆が鍵乙女を信仰する最も大きな理由となっている。その事例を直接見た者はおらず、完全に消え失せるわけではないが、鍵乙女が触れた門の近くにはある村等では、実感として明らかにフェルとの遭遇件数は減るのだという。

「へっ、その鍵乙女様とやらは一体いつになったら現れてくれるのでしょうかなあ？」

と、ウエイトレスの少女の背後から野太い男の声が水を注す。

「教会の方が仰っていたんですよ？　もしかしたらもうこの街に来ているかもしれませんよ」

救いを手放すまいとしてか少女が反論する。男はその願望が無駄であるとしても嘲笑うかのように手に持っていた酒のジョッキを飲み干した。

「元々教会はその辺りの情報はひた隠しにしてるだろうが。大体あの小僧が本当に教会の人間かどうかも怪しいもんだぜ」

「まあまあ落ち着いてください」

そんな不毛な議論にオルヴスが割って入る。正直なところ彼にこの議論は全く関係がないのだが、うるささに頭を抱えた自分の主人を見て動かざるを得なくなつたのだ。

「話していても埒が明きませんよ。なんにせよ、世界中を鍵乙女が巡り門を操作しているのは事実です。確かな情報が伝わらないのはその鍵乙女の身の安全を確保する為。故に皆さんが不安になる気持ちもわかりますが、そこは辛抱頂いて待つてくださると鍵乙女様も心労が和らぐのではないかと邪推しますが」

「けっ、まるで知つたような口振りだな」

「色んな場所を旅しているとたくさんの方々と同じ事を言いますからね」

言う事は言つたとオルヴスは席に戻る。しかし。

「大体鍵乙女様の心労だと？　それが仕事なんだろうが。大事な大事な使命だろ？　それを心労なんかで疎かにされでもしたら、世界中の人間がフェルに食い殺されちまうぜ。ま、鍵乙女様には優秀なフラインダー従盾騎士とやらがついてるらしいからな。どうせ死にやしねえんだろうが」

吐き捨てるように語られた男の言葉は最後まで言い切られる事はなかった。

悪態を吐いていた男の口はオルヴスの右手によって鷲掴みにされ封じられていた。オルヴスの頭より二つ分程高く持ち上げられ、何が起こつたかもわからないといったように身動き一つ取れていない。

何が起きたかわかっていないのはその男のみならず、すぐ側に居た筈のウエイトレスさえも、その店の誰もがオルヴスの動きを全く捉える事が出来なかった。

「お、オルヴス！ 何やってるの！」

「ああ、申し訳ありませんアノ様」

男の顔面を掴んだまま降ろす素振りさえ見せないオルヴスに、いち早くアノが慌てて詰め寄る。だが、彼は主人のそんな言葉にも全く悪びれた素振りを見せず、うわべだけの謝罪を述べる。そして意にも解さないように、視線を右の手に掴んでいる男へと向けた。

「大事な使命、確かにその通りですね。鍵乙女が動かなければ世界中にフェルが蔓延し、人々の生活はままならなくなるでしょう。それほどまでに大事な使命に、欠片程の心労もかからないと？」

返事を待つように台詞に間を持つが、男がそれに答えられる筈もなく、ただ恐怖と動揺に染まった眼を向ける。

「まあ、少し考えればご理解いただけるでしょうが……酒の席での暴言とはいえ、見逃せませんね、先程の言葉は」

「オルヴス、もういいから」

アノが男を持ち上げたままの腕を抑え、止めに入る。オルヴスはここではじめて店内の視線が自分達に集中している事に気付いたのか、肩を竦めて見せた。

「そうですね……わかりました」

興味が失せたとしても言わんばかりに無造作に手を離し、男を床へ落とす。男の知り合いらしき数人が彼の元に集まったが、意にも介さず、アノの方へと向き直った。

「食事どころではなくなっしまいましたね」

「全く、誰のおかげだと思ってるの」

周囲に出来た人垣を眺めながら苦笑すると、その中から一人、身なりのいい初老の男性が前へと出てきた。

「失礼。私はこの街の保安官をしている者です」

何の脈絡もなく現れたその人物に多少の警戒を込めた眼差しを込めながらオルヴスが前へ出る。

「何か御用でしょうか」

「いえ、たまたま店の前を通った所何やら騒ぎが起きていたようなので。この街は多くの人々が行き交う故にいざこざもよく起る。それを取り締まるのが私めの仕事でございます。少し、お話しを聞かせてもらえますかな？」

「……わかりました。それでは」

「待ちなさい」

保安官の言に承諾の意を示そうとしたオルヴスをアノが制止し、前へ出る。次から次へと舞い込むトラブルに嫌気が指して来た様子だ

った。

「やっぱりこんなのあるだけ無駄よ。邪魔だし」

言いながら、アノが街に入る前に被らされた白のフードを剥ぎ取ってオルヴスへ返す。途端、それまでざわざわと雑言を交わしていた烏合の衆が水を打ったように静寂を取り戻した。

そこに居る誰もが、アノの素顔を凝視し、言葉を失う。先程まで酔った勢いで騒いでいた男でさえも啞然と開いた口が塞がっていないかった。

「私の従盾騎士が失礼を働いた事、お詫び申し上げます。しかしながらそれは私、鍵乙女アーノイス・ロロハルロント・ポーターを案ずるが故の行為。どうか恩赦くださいますようお願い申し上げます」

その様子を一瞥した後、アノは整然とした態度で周囲の民衆へ頭を下げた。数瞬の沈黙が流れる。

「……鍵乙女様」

誰かがそう口にした、その瞬間。狭い店内を先程の騒ぎを大きく上回る喧騒 歓声に包まれたのだった。

アーノイス

アーノイス・ロロハルロント・ポーター。ギティア大陸の東に位置する、大国ロロハルロントの“元”王女にして現在の鍵乙女。元というのは鍵乙女となった時から彼女の身柄はアヴェンシス教会の保護下に置かれ、何人たりとも容易に近づく事が許されない存在となつた為である。鍵乙女は文字通り世界の安寧の鍵となる存在で、自らを選んだ従盾騎士と共に世界に五つあるとされる「門」を巡る旅をする。

大樹の街セパンタにはその門の一つが置かれている。街の名前にもなっている、天を衝く大木セパンタの元に、他の門同様、初代鍵乙女となった人物が造つたのだという。

現在の鍵乙女であるアーノイスはその門を目指し、この街へと辿り着いたのだが。

「全く、聞いているんですかアノ様？」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

その鍵乙女は現在、自分の従者である筈の従盾騎士の青年に、領主の屋敷の一室にて少々お説教を喰らっていた。

扉も窓も大きめの物が一つしかないが、赤を基調とし綺麗に整頓された部屋に一つだけある椅子にアーノイスが腰掛け、オルヴスがその前に立っている状況だ。

「確かに騒ぎは事もなしに終わりましたが、外、見てくださいよ。街中全部を上げてのお祭り騒ぎになってるじゃないですか。鍵乙女は民の前に姿を現さずに使命を全うするものなのですよ？」

鍵乙女は本来、民衆に知られぬ間に門へと赴き、その役目を果たす。しかし今回はアーノイスがわざわざ自分の素性を明かし、すでに世界中の人間に知られていると思われる素顔を公表してしまったおかげで、セパンタの街は完全に祭りのような雰囲気になってしまっていた。街の全貌を見渡せる部屋の窓からは、日も沈んだと思えない程の灯りに包まれて、人々が歌えや踊れやの大騒ぎの様子が伺える。

「元はと言えばオルヴスが騒ぎを起こすからでしょ？ 私は大人しくしてたつていうのに……」

「僕は従盾騎士ですから。貴方が無碍に扱われて冷静で居られないのは当然です」

あくまで毅然たる態度で自己正当化するオルヴス。アーノイスはその言葉に呆れるやらでも嬉しいやら、複雑な心情を込めた眼差しで溜息を吐いた。

「ですが……すみません。思慮が足りませんでした」

「い、いいのよオルヴス。まあ、街の人たちも歓迎してくれてるみたいだし、宿代もかからなかったし、ね」

とはいえやはり思うところがある様子のオルヴスへアーノイスがフオローを入れる、が。

「拘束したりせずに、真っ先に排除してしまえば良かったですね」

「そっじゃないから!」

その思うところというのは、彼女の予想と違い随分と的外れだった。

「はあ……全く。貴方はどうしてそう直線的な考えしかないのかしら」

「はははー、アノ様に言われたくはありませんよー」

冗談はやめてくださいとでも言わんばかりに軽く笑うオルヴスだったが、不機嫌さを隠さない主のジト目を向けられて押し黙る。なんだかんだ、主には逆らえない従者の青年。

従者が反省の色を垣間見せたのを見て、アーノイスは一つ咳払いをして言葉を続けた。

「こ、今回は私もその、思慮が足りなかったわ。でもそれは貴方も同罪だから、両成敗って事で、この話は終わり！ いいわね」

「お言葉の通りに」

それにオルヴスが恭しく膝を着く。

「……私も、もっと鍵乙女らしくならなくちゃ……」

頭を垂れたオルヴスには聞こえないようにか、アーノイスは己に言い聞かすかの如く呟き、立ち上がった。

「さて、そろそろ行きましようか。あまり長居してしまうのも悪いし、今夜の内に済ませてしまいましょ」

それは門を訪れての儀式。鍵乙女が世界を巡る唯一の理由。絶対の使命。

「準備はよろしいのですか？」

オルヴスが確認を取る。アーノイスはそれに頷くだけで答え、部屋の出口へと向かう。それに先立ち、オルヴスが扉を開けた。

音もなくそよ風すら感じさせず瞬時に動く従者の動きは、彼女にしてみればさして驚く事でもなく、もはや慣れたものだ。

「それでは裏口から大樹の元へ参りましょう。正門では領主殿が鍵乙女様に民衆へスピーチして欲しいと首を長くして待っていますから」

「それは……御免蒙るわ」

「丁重にお断りしたのですけどね。きっと姿を見たら逃がしてくれないよあの様子では」

民衆の為に、引いては世界の為に、平等に。それが、彼女の役目なのだ。

門

二人は人目に付かないよう、屋敷の裏口より街の外へと出た。街を覆っている塀はオルヴスがアーノイスを抱え、一足で飛び越える。今、門から出て行ったとしても衛兵も酒に酔っていると思われる程の喧騒が未だ聞えるくらいだが、念には念を入れて、だ。

「大樹は北門の道を通り直ぐに向かうだけですわね」

道の向こうは夜という事もあり、月と星の明かりだけで行き先は暗い。しかし、目標とする大樹は街から漏れる灯りで影が伺える。夜闇にさらに一層濃く浮かび上がる天まである巨大な一本の樹。空へ空へと向かって伸びるそれは、まるで道標のようにも思えた。

無言で先へ進むアーノイスとオルヴス。門での儀式に神具も魔具も必要ない。大切なのは鍵乙女という存在そのもの。言いかえれば、鍵乙女以外に門へ干渉する方法はない。

段々と細くなる街道、それが獣道のように代わり、周囲の木々が大樹が見降ろす空を隠した路をまた少し進んで、二人は「門」へと辿り着いた。

そこだけが切り抜かれたように木々も草花もない。円形に象られた広場の中央に先程影でしかなかった大樹セパンタが見える。

「本当、何度見ても驚く大きさね」

樹に近づき、もはや先が見えないセパンタを見上げるアーノイス。

「この樹は千年前、初代鍵乙女が門を創った際に共に植えた種が成長したものとされています。千年も昔からこの場所に居たんですね」

セパンタの樹冠が今どうなっているのかは誰も知らない。頂点は既に雲を突き抜け、気球を用いたとしても見えない場所にあるのだ。

「そしてこれも、千年前造られた時からずっとここにあるのね」

そう言って、セパンタの根元すぐ近くにある巨大な壁を撫でるアーノイス。

木でもなく、石でもなく、金属でもない堅く分厚いそれは、両開きの四角い「門」。高さは5m、幅は3mといったところ。どう見ても何かの扉にしか見えないというのに、その向こうにも無論こちら側にも何も無い。ただ、そこに立たされているだけの扉。靈呪術を用いて造られたその門には炎のような、水のような、風のような、何とも取れない複雑な印が模様のように浮かび上がり、厚く、堅く、冷たく不気味で、近くにいくだけで心が引き締められる清廉な空気を放っているようにも思える。

アーノイスは触れていた手を離し、五歩ほど距離を取った。今一度門を見つめてから目を閉じ、一度深呼吸をする。

「……オルヴス。はじめるわ」

「……了解しました」

アーノイスの宣言を受けてオルヴスは周囲の気配を探り、何もない事を確認してから返事した。

もう一度、鍵乙女は呼吸を整える。そして、静かに、両腕を広げた。

オルヴスは少し離れた場所でそれを見守る。周囲への探りは忘れな
いものの、主からは決して目を放さない。これまでも幾度と行って
きた儀式。それでも、気は抜かない、抜けない。
それほどまでに大事な事なのだ。

静かに、儀式ははじまった。

アーノイスと門、その双方から陽の光とも月の光とも取れる光が生
まれ始める。ぼんやりと灯るのみだったそれは徐々に形をなし、門
は印を、アーノイスはその身体から、四肢から、門と似た刻印の光
を輝かせる。徐々に強くなっていく輝きが閃光となる寸前で止まり、
荘厳な音を立てて門が開き始めた。

何と擦れているわけでもなく、まるでこの世界そのものと擦り合っ
ているかのような声を上げながら門がひとりでに開く。その向こう
は闇。黒い靄が蠢いている、そんな様子だった。

門が完全に開き切ると同時、その靄から幾つもの光の球が飛び出し
た。赤、青、緑、その他同じ色などはないかと思わせるほ
どに色とりどりに光る拳大程の球体は次から次へと「門の中」から
飛び出していき、まるで何かに導かれるかの如く天へと昇りその姿
を夜闇に溶かす。

空へ螺旋を描きながら昇り消えて行く光の球の出現が少なくなつて
くる頃、アーノイスは広げていた両腕を閉じ、胸の前で交差させる。
それに反応するように突如として靄の色が黒から一切の淀みがない
白へと変わった。澄み切った純白だというのにまるで眩しさを感じ
ないそれに人が抱く感情はきつと、安堵だろう。

だがしかし、それは長続きのしない安息の光であるのかもしれない。

靄が完全に白へと変わった途端。門の周囲の空気が震え、木々を揺らす。

あらゆる方向から、何かが向かってくるのをオルヴスは感じ取っていた。だが、アーノイスの儀式に毎回付き添っている彼は特別身じろぎをせず、ただずっと、自分の主の背中を見つめる。そして、大気を震わす正体が悲鳴も似た風切り音を立てて現れた。

それは黒い光球。先程の色とりどりの鮮やかなそれとは明らかに異質な光を放つ、が、明らかに違うとも言えないその球体。そして、突如現れた無数の黒い球体群は真つ直ぐに、門の向こうにある白い靄の中へと吸い込まれて行った、その瞬間。

「うっ……ああっ……！」

それまで目を閉じ、瞑想していたアーノイスが苦悶の声を上げた。交差していた両手で自分の肩を握り締め、爪を立てて唇を噛む。口元からはすぐに血が滴りはじめ、彼女の身体は何かには怯えるかのようには震えていた。

オルヴスはその様子を見、思わず飛び出しそうになるのを寸前で堪えた。ここで止めてしまつては儀式は完了しない。無数の光を空へと還す、そんな綺麗なだけの儀式ではない。それを彼も知っていた。闇から現れる闇よりも黒い夥しい数の球体が流れて行く、凄絶な光景。先程の鮮やかな光球の螺旋など嘘のよう。

黒い球体の集合が勢いを増すごとに彼女の震えは酷くなり、遂には膝を着く。まるでそれが合図とでもなつて、黒球はその襲来を止まつた。

震える両腕を無理やり動かすようにアーノイスが胸の前で両手を組むと、「門」は大きな音を立てて閉じる。

と同時、なんとか膝支えられていた少女の身体は糸が切れたように崩れ落ちた。

「頑張りましたね……アノ」

地面に落ちる前にオルヴスが受け止め、頬笑みかける。アノノイスは目を瞑り、既に気を失っていた。

肩と膝に腕を回してその身体を抱きかかえるオルヴス。門は儀式の前と同じように、異質な空気を放ちながらも静かに佇んでいる。

血が滲む唇を自分の服の裾で拭い、オルヴスは抜けだして来た屋敷に戻るべく歩き始めた。

従盾騎士　　フラインダー

大樹の街セパンタを出発して数日　。

二人は次の門を目指して再び旅を続けていた。

「アノ様、前方に山小屋が見えますが如何いたしますか？　この先は一つ峠を越えなければならぬのでこのまま進むと野宿になりますけど」

時は夕暮れ。空は晴れていて風も穏やかなままだが、オルヴスが言う通り、彼らの前方には山道へ続く路とそれに少し逸れて山小屋らしきものが見える。オルヴスは野宿であつても別段問題はないのだが、門の儀式は周期的に行う事に行っている為、急ぐ旅でもないのだ。

「寝れる所があるならそつちにしましょう。貴方も疲れてるでしょ」

アーノイスもそれは熟知しているので、そう決断した。

「僕の事はお気遣い無用ですが」

「私ともう馬車に揺られ飽きたのよ。いいから早くその山小屋とやらに行きましょう」

「わかりました」

いつもの微笑を浮かべながらオルヴスは馬を山小屋の方向へと向かわせた。

「割と新しいようですね。誰かが立て直したのでしょうか」

外見は木造の古びた小屋そのものだったが、中は最近補修されたよう
うでまだ木の香りが残っていた。大きめのベッドが奥にあり、右の
手前にレンガ造りの暖炉とそれに使う薪が、反対側には毛布等がま
とめて置いてある。

「この暖炉、着火の呪術がかけてあるのね。これはまた随分便利な
山小屋なこと」

アーノイスが暖炉の中、丁度中央に刻まれている印を見て呟く。
ものに直接印を刻み、大気や大地に満ちる霊力を使って様々な現象
を引き起こす術を総じて呪術と呼ぶ。呪術はこの暖炉のみならず、
人々の生活に深く根ざし、支えている。

「可燃物を置くと勝手に火が付いてくれるように刻んでありますね。
これはまた随分と高尚な……きつと火系術の才に恵まれた方が作っ
ていったんでしょう。アノ様、うっかり踏んでしまわないよう気を
つけてくださいね」

「そんなことしないわよ。ちゃんと柵だって付いてるじゃないの」
呪術は印を刻んであればその通りに術が起こるが、効力のある術を
刻むには持つて生まれた素質が必要になる。高度な術になれば成る
程その必要性が高くなるのだ。

「ふむ……少々薪を足して置きますか。僕達が使つ分には十分ですが、この山小屋は妙に親切ですからね」

荷物を部屋の隅に置き、小屋を出て行こうとする、が。

「……どうかされましたかアノ様」

歩みを止める、否、止められるオルヴス。視線を足元に送ると、暖炉の前に座り込んだアーノイスが彼の片足の裾をしっかりと掴んでいた。

「待ちなさい。薪なんて明日の出発前でもいいですよ」

「いや、でもまだ陽が落ちるまで時間がありますし……」

「つ、疲れてるでしょ」

「ええと……僕は別に」

あくまで外に出て行こうとするオルヴスをアーノイスはどうしてか中に引き留めたい様子。

「お腹空いたから先に食事」

「ああ、せっかくですから何か探ってきてきましょう。山ですから探せばすぐに見つかると思います」

「うー……わ、私がすっかり暖炉の所に毛布でも落として火事になったらどうするのよっ」

「一秒経たずに飛んで来ます」

恥を忍んで捻りだした口調からして最後の一言だったようだが、問題はないとオルヴスに結論づけられてしまう。彼ならば実際に有言実行出来るので尚更何も言えない。

万策尽きたようでも未だ手は放さない主の姿を見、仕方なく、オルヴスは溜息混じりに笑って折れる事にした。

「わかりました。薪割りとは明日の出発前にする事にします」

「そ、そう」

素気ない返事ながらもようやく手を離すアーノイス。

「ですが食料は今持っている保存食を使うより現地調達した方が後の為にいいと思うんです。ですから、アノ様も一緒に参りますか？」

「そうね。たまには散策するのもいいわ」

「はは……散策じゃなくて狩猟採取なんですけど……」

アーノイスの手を取って立たせるオルヴス。

彼女が独りになりたくない理由。それもわかっている手前、無理を強いる事は彼には出来なかった。

「オルヴス、この真っ赤なキノコ美味しそうじゃない？」

「それはあれですね。口にしたら三分で天に昇れます。地獄にも墮ちれます」

「あ、あれ大きな木の実ね」

「あれはアカミノスバチの巣です。木の実に似せた巣を作り、寄ってきた鳥を逆に補食する危険な蜂です。触らないでくださいね」

「お、オルヴス。このモフモフしてるの何？」

「ええと……眠っている熊ですね。大きいな……4mくらいですかね」

元王族の鍵乙女様は100%の天然自然に触れるのは珍しいようで、気の抜けない時間となってしまったオルヴス。山の中に入るのはこれがはじめてというわけではないのだが、彼女自身の足でゆっくりと散策するのは今までなかったかもしれない、と改めて思い直す。いつも馬車の中で寝ているかオルヴスと雑談を交わすか程度だからだ。

フラフラと出歩くのは彼がまずさせないというのもあるが。

鍵乙女である彼女はいつその身を狙われているかもしれないのだ。護衛として、従盾騎士として気は抜けない。その事はアーノイスも十分熟知しているだろう。故に、そんな精神の負荷からも守らなくては、オルヴスは思うのだった。

「さて、そろそろ戻りましょうか。材料は十分ですし。今夜は熊鍋にしますかねー」

「わ、私……熊は食べた事ないのだけれど……大丈夫かしら」

「美味しいんですよ。手とか」

思わず出会えた巨大な食糧を片手で引きずりながらオルヴスが笑顔でそう語るのを、アーノイスは洗面で見つめていた。

声

『……たい……』

『……き……い……』

『………生きたい』

ああ、またこの声。

原因も正体もはっきりしているのに、いつまで経っても慣れる気配がないその声、言葉、心。

『生きたい』

わかってる。わかってるから、私に叫ばないで。

『生きたい』

あつちの声は沢山聞こえてくるのに、こつちの声は全く届いてくれない。

『生きたい』

やめて。貴方達の願いはわかってるから。

『生きたい』

お願いだから聞いて。

『生きたい』

誓い

「もうやめてよ！」

叫び声と共にアーノイスは飛び起きた。身体は汗だくで起きたばかりだというのに息が上がっている。

山小屋のベッドの上、窓から望む空はまだ夜だった。虫も鳥の声も聞こえず、深い夜だというのが経験からアーノイスにも何となくわかった。

荒い呼吸を整えて何とか落ち着きを取り戻そうとする。だが、余りにも静かな夜という環境が、夢から醒めた今でも先程の声をリフレインされるような気がして、彼女は思わず耳を塞いだ。無駄な事は分かっている。だが、恐怖が彼女をそうさせていた。そのまま、ふと気づいて小屋の中を見回す。満月の月明かりが入って来ているおかげで、室内は少しくらいなら見えた。故に、自分が眠りに着くまではそこに居た筈の存在が消えている事にすぐに気付く。

「……………どこ行つたのよ」

独り暗闇で呟いてベッドを下り、小屋の出口へ向かった。本来ならそこまでで彼を踏みつけていてもおかしくはないのだが、残念ながらその感触はなかった。

ゆっくりと戸を開き外を見る。人工的な灯りなんてものは一切なく、月明かりだけがぼんやりと昼間見た外を照らして、まるで別世界のようだった。

「眠れないんですか？」

突如掛けられた声に驚いてアーノイスの身体が跳ねる。けれどその声の主がよく知っている人物の声で彼女の心に安堵が戻ってきた。それはまるで酷く久々の感覚にも思えていた。

「お、オルヴス、貴方何してるのよ。そんなところで」

声の主、オルヴスは小屋の前の階段に腰掛けている。別に手に何かを持っている様子もなく、一体全体何をしているのかアーノイスにはわからなかった。

「いえ、特に何をしていたというわけでは。アノ様こそ、大丈夫ですか？ 酷い顔をしていますよ」

言って、オルヴスはポケットから取り出したハンカチで汗の滲むアノの額を拭う。

「や、やめなさいよ。それに、酷い顔とは何よ酷いとは」

少しの間されるがままにしていたものの、恥ずかしさが勝ったのかやめさせて、オルヴスの言葉に膨れたフリをするアーノイス。

「いえ、アノ様はお美しいですよ？」

「そういう事を言ってるわけじゃ……」

反論しかけて自分の言葉が先程とちぐはぐになっている事に気づいて言葉を失う。

「それで、どうかしたんですか？」

オルヴスはそれに気づいた素振りを見せずに話を元の場所へ持つて行った。アーノイスは少しの間口をつぐんでいたが、オルヴスが何も言わず見つめて待っていて、ゆっくりと口を開く。

「また、声が聞えたのよ。それだけ」

それだけ、と強がっては見たものの、オルヴスにそれは通用しない。そんな事は彼女自身熟知しているが、それでも繕わずには居られない性分なのだ。

「靈魂の声、ですか……今度教会に戻ったらその辺りについて詳しく調べてみましょう。何かいい策があるかもしれません。残念ながら僕の知識ではその辺りの事は上手い解決方法が見当たらないもので」

最近になって彼女の耳に届き始めたという声。オルヴスも詳しい所までは聞かされていないが、どうやらそれは彼女の行う儀式が原因となっている気がするとの事はアーノイス本人が以前語っていた。

「あ、ありがと……でも、いいのよ別に。そんなことまでしなくたって」

オルヴスの言葉に珍しく素直に感謝したものの、遠慮を示すアーノイス。そんな彼女に従者は首を横に振った。

「僕は貴方を守ると誓った、貴方の従盾騎士です。それが僕の使命ですよ」

そこまで言われては押し黙るしかなく、少女は顔を背けて青年の横に腰を下ろす。

その後少しして、少女は青年の肩を借りて眠りはじめた。もう、声は聞えなくなっているようだった。

グリム

「アノ様、アノ様。起きてください」

次の日。アーノイスは獣道に揺れる馬車の中で目を覚ました。

オルヴスは山小屋を既に出発し、アーノイスを荷車の中に寝かせ、馬を走らせていたらしい。

すぐに出発するような時でもオルヴスは滅多に彼女の事を起こさない。だが、今回は敢えて、馬車を止めてアーノイスを起こしに来たのだ。まだ寝惚けが抜けきらない彼女の頭でもその事の次第は理解出来た。

「何かあったの……？」

目を擦りながらも声を小さく抑えてオルヴスに問う。

「ここで動かずに待っていてください。いいですか？ じっとしていてくださいよ」

具体的な答えは出さずにそう主人に耳打ちすると、オルヴスは静かに荷台から出て行った。怪訝な瞳を向けるアーノイスだったが、事態を把握しきれない為、下手を打つ事も出来ず、言われた通りに身を固め、幌の隙間から外と出て行った従者の様子を窺う。

山の中に入っていると想像、陽の光もあまり入っておらず、太陽の位置からして真昼間だというのに薄暗い。

加えて生き物の声がせず、辺りは変に静まり返っているように感じられた。

アーノイスはそんな様子を把握すると、目を閉じ、嗅覚、聴覚を意識から排する。目に見えず、音に聞こえず、何も匂わない。そのどれでもない時、人はもう一つの異変の可能性を感じようとする。世界に人にあらゆる生命に満ちている「霊力」。命の力そのものと称されるそれは、生物の五感のさらに外の感覚で知覚されるものなのだ。

「これは……」

アーノイスは目を開き、独り呟く。その瞳には少々の驚きと呆れの色が濃く写って見えた。

「さて、かくれんぼはそろそろ止めにしませんか？」

馬車の前に立ち、真っ直ぐ前を見据えてオルヴスが柔らかな口調で、そう虚空に問いかける。

当然のように返答はなく、オルヴスは溜息をついて首を振った。次の瞬間。

オルヴスの見つめていた方向から唸るような音、同時に巨大な火球が出現し、真っ直ぐにオルヴスへ向けて放たれた。

草木を焼き払い、地面を溶解しながら迫りくる閃熱。

「オルヴス！」

荷台からアーノイスが身を乗り出して叫ぶ。それに応えるかのよう

に、ゆっくりとオルヴスに右手が、火球へ向けて翳された。着弾する火炎。しかしそれは爆散するでもなく、またオルヴスも馬車も焼失させるべく突き進むでもなく、ただ、ぶつかったその場所で動かない。

「全く、出てこないでくださいと言いましたよ？ アノ様」

翳した右手で事もなしと火球を抑えながら、主に向けて苦笑を向けるオルヴス。その手は淡い青白の光を帯びていた。軽くその手を振り、炎をかき消す。

「し、仕方ないでしょ！」

「大丈夫ですから。サンドイツチでも食べて待つていてくださいよ」
真剣に叫ぶアーノイスを若干からかうかのように彼はゆったりと歩を進め、馬車と距離を取った。

「もう……いつもいつも」

呆れて悪態を吐きながら、アーノイスは自分が寝ていた所の横にバスケットが置かれているのを見つけ、手を伸ばす。

「アンバタじゃなかったら後でお説教ね」

「いいいいやつはああああ！」

アーノイスが呟いたのと奇声が轟いたのはほぼ同時。
オルヴスの遙か頭上より襲来する、炎の剣を振り翳した一人の男。空を“蹴り”、一瞬で肉薄しその剣を振り下ろす。

「相変わらず騒がしい方ですね。グリム」

「相変わらず企画外な奴だぜ！ オルヴス！」

先程の火球同様、オルヴスの光を纏った手が斬撃を防ぐ。力が拮抗した瞬間に二人の身体が跳ね、距離が置かれた。

「んー、やっぱ切れねえか。せめて火傷くらいは負わせたかったんだけどなあ」

身の丈程もある大剣を両肩に担ぎ、右に左にと揺れる、グリムと呼ばれた男。年はオルヴスよりも一つ二つ下程度。燃え盛るような紅い髪に同じ色の眼。教会の金のタウ十字が描かれた白い服の上に鎧の肩当て、膝当て、胴当てだけをつけた格好だ。

「貴方こそ。詠唱もなしにここまでの火炎を起こすなんて、靈術の基本を無視していますね」

己の持つ靈力に詠唱を重ね、現象を起こす術を総じて靈術と呼ぶ。靈術は呪術とは違い、主に人々が戦う術として使われるものが多く、先程グリムが見せた空中での動きも、靈力を固めて足場とする靈術の基礎の一つである。その程度ならコツさえ掴めば詠唱は不要だが、グリムの起こした火炎という現象はそれに当てはまらない。いくら修練を積んでも、靈術の法則から外れるのだ。しかしそれはオルヴスが纏う光の方にも言えた事ではあるが。

「俺様は特別性なんだよ」

言って、剣を地面に叩きつけて炎を纏わせるグリム。

「続きやろうぜ。ここんところ碌な敵と会っていないんだよ。セパンの儀式が終わってここら辺はフェルと全然遭遇しねえし」

「僕は貴方の敵ではなく同僚なんですけどねえ……」

グリムの格好から分かる通り、彼はただの変な襲撃者ではない。オルヴスと同じ教会に属する騎士の一人。

元従盾騎士候補グリム・ティレド。若齡でありながら以前は教会一の腕を持つとされた男だ。

「んだよー、細けえこたあいじゃねえかよおー。久々に会ったんだぜ？ 剣と拳で愛し合おうぜ？」

教団内でも常勝無敗とされてきた彼。だが、それも数年前にはじめての敗北を喫している。鍵乙女アーノイスの御前で開かれた、従盾騎士を決める為の武闘大会。その最後の戦いでグリムはオルヴスと戦い、敗れたのだった。

「お前だけだオルヴス。俺が戦ってて、どうしようもないくらい楽しいのは！」

それは彼にとってこの上なく予想外で、喜ぶべき事だった。グリムの剣が纏う炎が、感情に合わせるように膨張する。火炎はもはや剣を覆い尽くし、グリム自身の身体さえも包み込んで、空気を焦がす。

「本当、熱い男ですねえ……」

オルヴスも、彼がこうなってしまうては説得では止めるまで面倒になるので戦闘態勢を取る。腰を落として上半身を逸らし、顎を引いて相手を見据え、両の腕の力をダランと抜いた独特の体勢。

「んだよ。本気でやってくれないのかよ？」

だが、それでもグリムは不満げにオルヴスを睨む。

「この姿のまま、少々お相手させていただきますよ」

オルヴスはそれに、口角を僅かに上げて嘲笑を返した。無論、わざと挑発しているのだ。

「チツ……後悔すんなよ！」

さらに火力を上げたグリムの周囲の地面が赤熱化し、溶ける。

「させてみてくださいよ」

オルヴスの言葉が合図になり、二人が同時に直進し

「オルヴスー!!」

森を震わす程の怒気をはらんだ絶叫が、止めた。

「うわっ！」

高速で動いた二人に吹き飛ばされた大気が戻る勢いで起きた突風に、荷台から出てきたアーノイスは堪えながらも、視線は自分の従者を睨みつけている。

オルヴスとグリムはお互いの拳と剣がぶつかる寸前で止まったままだ。

「え、ええと……如何なさいましたかアノさ」

「どうもこうもないわよ！ 何よこれ！ このサンドイッチ、ピクルスが入ってるじゃないの！」

「えっ、それ僕のなんですけど……」

戦いの最中であつた事を忘れ、構えを解き、怒れる主の元へ弁明すべく近づいて行くオルヴス。

彼の主はピクルスが大嫌いであつた。

「サンドイッチなんて食べないと中身わかんないじゃない！ 分けてるなら名前書いときなさいよ！ むしろサンドイッチは全部アンバタにしときなさいよ！」

「そんな無茶苦茶な……」

流石にこれは予想外だつたか、オルヴスも少々頭を抱える。そんな二人の様子を見てか、グリムもようやく固まつた状態から剣を降ろしてアーノイスらの方を見た。

「おいおいアーノイス様よお、俺達今戦つてたとこなんだけど」

「ああ、やっぱりあんただつたのねグリム。何でこんなところにいるのよ。あんたは目的地の偵察が任務でしょ。私達に追いつかれてどうするのよ」

不機嫌さを隠しもせずグリムへも未だ怒つたままの視線を向けるアーノイス。

グリムは溜息を吐き、取り敢えず大剣を背中の中の鞘にしまいこんだ。やる気が削がれてしまつたらしい。

「俺だつてさあ、もう二つも先の村に居たのに教会がさあ、二人に一度戻つて来いって伝えるなんて言うからさあ、急いで戻つてさあ、きたんだけどさあ」

「は？　なんでよ？」

「知らねーよー……まあここからなら教会もそんな遠くないし、鍵乙女様の大好きなアンバタでも買いに戻れば？」

戦う事以外は基本的にどうでもいい性分のグリムは頭の後ろに手を組んでその辺りをフラフラとしてはじめる。元従盾騎士候補とはいえ、彼は別に敬遠な信者でも鍵乙女を守るといふ使命に惹かれたわけでもなかった。

「では一度教会に戻る事にしましょうか。わざわざ呼び付けるといふ事は何か大事な用があるんでしょう」

「待ちなさいオルヴス。その前にこの私の後味の悪さを何とかしなさい」

ピクルスの独特の酸味や塩味が未だ口の中に残っているのだろう。気分が悪そうに顔を歪ませるアーノイス。

「あ、ははは……今代わりを作ります……」

「全く、本当我儘なお姫様だな……」

オルヴスは愛想笑いを、グリムは呆れて眩きを漏らしていた。

フェル

「そういえばグリム。セパンタでフェルと戦ったそうですね？」

「あ？　なんで知ってたんだよ。まー俺様にかかれば小物だったが、街の警備団やただの掲剣騎士クワイターにや荷が重そうだったからな。腹こなし程度に　」

グリムが合流し、教会へと進路を変える一行。オルヴスは騎手を、アノは幌の中、グリムは「鍛錬の一環！」と馬車に併走していた。

「ご丁寧にアノ様の事を吹聴したそうですね」

「ああー……そんな事もあったっけか……」

山道を抜けて野道を進む三人。何も無い原っぱに続く、人々の足跡が作った路がただ一本、地平線の彼方へと続いている。

「そのせいでトラブルを被りました。大司祭様にご報告しておきますね」

「ちよつ待てよー、わざわざ親父に言い付けるこたあねえだろ。フェルっていう化物の襲来に怯える無辜の民草に、一筋の希望を与えてやっただけだぜ？」

「駄目よ。そのせいで騒ぎになっちゃったんだから」

「そついう事です」

冷たい二人の言葉にがつくりと肩を落とすグリム。年頃の少年に有りがちなように、彼は父親である大司祭との折り合いがよくなかった。本来ならば司祭の後を継ぐべく教会にて信官となるのが通例であるのに、本人は現在掲剣騎士の一員として、オルヴスとアーノイスの二人に先んじて門の元へと赴き、道中の危険その他を排除、探知を目的とした任についている事からもわかる。

掲剣騎士とは、アヴェンシス教会の庇護の下に人々を守る為に剣を掲げる騎士たちの事である。本来はそれぞれの街や村の教会に駐在し、その街をフェルから守る事を役目としている。グリムは形だけは掲剣騎士となっているが、前述の通りの仕事をしているので、普通とは違う扱いの場にあるが、教団の構成員には変わりない。それを総括しているのが彼の父親である大司祭となっていた。

「ったく……あの糞親父、俺がなんか小さなミスしても付け込んでこごぞとばかりに説教喰らわすからな。やってらんねーっつーの」

「……まあ、あの件はグリムだけのせいではないのですが」

「ん？ 何か言ったかー？」

「いいえ何も　ん？ グリム、止まってください」

雑談の最中、ふと前方を見たオルヴスがある事に気づき馬車を止める。何事かとアーノイスも幌から顔を覗かせた。

「どうかした？ オルヴス」

「女の子、ですかね」

す、とオルヴスが道の先を指さす。そこには一人の藤色の髪をした

童女が何をするでもなく立ち尽くしていた。

「こんなところであんな小さい子一人何してんのかねえ。ちょっとら聞いて来るわ」

「いつてらっしやいロリコン」

真っ先に近づいて行こうとしたグリムの出鼻をアーノイスがくじく。突然の言われようにグリムが思わず地面に突っかかり振り向いた。

「あのな姫様？ 俺は別に幼女趣味じゃないの。幼女にコンプレックスとか持ってないから」

「何言ってるのよ。メルシアにいつも引っ付かれてるじゃない」

「ばっ、あれは幼女とかそういう次元の人間じゃないだろが！」

メルシアというのは教会にいる、ある少女の事だが今は割愛。

二人がくだらない言いあいをしているのを余所に、オルヴスが未だ棒立ちのままの少女に近づいて寄っていった。

「あっ、オルヴスの奴……なあ、あいつの方がロリコンっぽくないか？」

「オルヴスをあんと一緒にしないで」

「はいはい……いつもながらゾッコンですこと」

そんな二人を尻目に、オルヴスは少女の眼の前で屈み、目線を合わ

せて話す。

「一人で何をしているのかな？」

「あのねー、待ってるの」

少女は突然現れた青年にも怖気づく様子もなく、朗らかな笑顔を浮かべて応えた。

「待ってるって誰を？ お母さんかお父さんかい？」

オルヴスの言葉に首を左右に振って否定する。

「んーんー。鍵乙女さまがね、近くにいららしいって、そんちよーさんが言ってたから」

それを聞き、オルヴスは怪訝な表情を浮かべた。

そこへ、言い合いを終えたのがグリムとアーノイスもやってくる。

「んで？ なんだってオルヴスさんよ」

「あ！ 鍵乙女さまだ！」

オルヴスがグリムの問いに答える前に、少女がアーノイスの方へ駆け寄る。突然の事に少々驚いたアーノイスだったが、無垢な少女の笑顔を見、柔らかな笑みを浮かべて膝を折った。

「えっと……どうしたの？ 確かに、鍵乙女は私だけ……よくわかったわね」

「写真で見たの。おとーさんが、新聞を見せて『これが新しい鍵乙女様だよ』って教えてくれたの。うわー、写真で見るよりもっと綺麗ー」

「あ、ありがとう……」

忌憚ない子供の贅辞に照れるアーノイス。そんな事はどうでもいいグリムは、先程から何か考え事をしているようなオルヴスの方へ声を掛ける。

「で？ 結局何だったんだ？」

「さあ……僕もまだ聞き損ねてしまして」

思索に更けるのをやめてグリムの問いに答えると、オルヴスはもう一度少女の側へと行く。

「お嬢さんお名前は？」

「ユレアだよ」

「ユレアちゃんか。いい名前だね。ユレアちゃんは何で鍵乙女様を待っていたのかな？」

そう、今度は核心を突いた質問をする。すると、少女は表情を曇らせて少し俯き答えた。

「村の近くにフェルがたくさん居て、危ないから鍵乙女様に助けてもらおうと思って」

いるのだから。

「村の近くに出ている、とわかっていて見過ごせる筈ありませんからね」

しかし、アーノイスがそれを常に適応出来るような人間ではないと、オルヴスはわかっていた。

自分も行くと伝えるべく、彼女は少女の元に向かう。

「……それに、少々気になる事もありますし、ね」

それを見つめていたオルヴスの咳きは、誰の耳に届くでもなく風に溶けていった。

兄妹

ユレアの案内で一行は件の村へと向かった。

彼女居た道端からそう遠くはなく、五分程歩くと小さな建物がいくつが集合して建っているのが見え始めた。

「こんなところに村があったなんてねえ。教会は知ってんのかね？」

村というよりは集落と言った方が合っているかもしれない。舗装された道などは存在せず、雑草を刈り取って地べたを道と見立てているようで、小さな木造の家々が適当な感覚で立ち、その周囲だけ雑草が背丈を合わせて刈られ、野菜などを育てたりもしているようだ。

「フェルが近くに出ているというのにわざわざ鍵乙女様を待っていたのです。恐らくは最近出来たか、もしくは閉鎖的な場所か……」

オルヴスの言葉通り、村に入ってもあまり人影は見当たらない。フェルが出没しているというのも関係しているのだろう。

「この前までね、牛さんとか馬さんとか鶏さんとかたくさんいたんだけど、皆逃げちゃったの……」

村を見回す三人にユレアは沈んだ顔をしてそう告げた。

フェルは、命あるものに仇なす存在だ。人間然り、牛や馬といった動物、鶏などの鳥、虫ですら彼らの中では襲撃対象になっている。例えば村の中で飼われていたとしても、己の生命を脅かす何かが近くにいるというのであれば、逃げるのも仕方がない事である。

「大丈夫よユレアちゃん。このお兄ちゃん達がフェルをみーんなや

つつけてくれるから。そうすれば牛さん達もきつと帰ってくるわ」

「本当？」

「ええ、本当よ」

アーノイスの言葉にユレアは破顔すると、軽快な足取りで一件の木造家屋の前へ走っていった。

「ここが私のお家！ えっと……ながたびでお疲れでしょう。きゅくつ？なところですが、くつろいでいってください」

一生懸命に言葉を絞り出すように歓迎の挨拶を述べる少女。

「へえ、ご立派な挨拶だな。誰に教えてもらったんだ？」

感心し、グリムがそう問う。

「おにーちゃんがね『もし鍵乙女様に会ったらこう言いなさい』って教えてくれたの！」

褒められて嬉しそうな笑みを浮かべて、ユレアは自宅の扉を開いた。

「ただいまー！ おにーちゃんー！」

元気な声で帰宅を告げ、家の中に消えて行く少女。

「えーっと……私達どうすればいいのかしらね」

置いてけぼりにされたアーノイスが首をかしげる。

「先程も言いましたが、教会はなさそうですしね」

「ま、取り敢えず入ってけばいいんじゃないかねー？ あの子だってアーノイス様を待ってたんだろうし」

思案するオルヴスとアーノイスを余所にグリムは何食わぬ顔で、開けっぱなしの扉の中に頭を突っ込む。

「ごめんくださいーい。鍵乙女と従盾騎士の愉快的な御一行ですけどもー」

「いきなり胡散臭く聞えるのは私だけなの？」

「いえ、僕も同感です」

とはいえ、もう進んでしまった事は元に戻せない。二人もグリムに続き、家の前で待機する。

少して、家の奥から翠色の髪をした青年と、その足元にひつつくユレアが出てきた。

「ああ、貴方方が……」

「ね？ ね？ 言ったでしょ？ 鍵乙女様だよ！」

鍵乙女の突然の来訪に少々面食らった様子ながらも、青年は深々と頭を下げる。

「遠路はるばるようこそいらっしやいました。こんな辺鄙な村にまで足を運んでいただけるなど……感謝の言葉もございません」

「たまたま近くを通りかかったものですから。そこでユレアちゃんが一人で見つけまして」

オルヴスが率先して前へ出て青年を言葉を交わす。

「ね？ 嘘じゃないって言ったでしょおにーちゃん」

「ああ。でもユレア、一人で外に出ては駄目だとあれほど言ったろう」

「ごめんなさーい……」

優しい口調でユレアを叱りつけると、青年は三人の方へと向き直った。

「申し遅れました。私はユレアの兄のクオンと言います」

「へ？ 兄妹？ びっくりしたぜ、親子かと思った」

「はは、良く言われます」

ユレアは5、6歳と言ったところ。青年はどうみてもオルヴスと同じかそれ以上に見える。グリムが驚くのも無理はない事だった。

「立ち話もなんでしょうから上がってください。狭いところですが、お茶ぐらいお出しできますよ」

「おっ、いいねえ。ちょうど腹が減ってたんだよなー」

「貴方はもう少し遠慮というものを覚えましょうか」

クオンの提案で、三人は家の中へと入る事にした。

招かれ、小さな円形の木テーブルに着く三人。

ユリアとクオンはキッチンでお茶の用意をしているようだ。

「良いわねこういう家。落ち着くわ」

木製のテーブルの手触りや質感を目で確かめるように眺めながらア
ーノイスが呟く。

「姫様は庶民の暮らしに慣れがなさそうだもんね」

テーブルの上にだらしなく上半身を伸ばしたグリムが明後日の方向
を見ながら悪態を吐いた。

「貴方だってボンボンでしょ。大司祭のドラ息子なんだから」

「だーもう、親父の話はだすなよなあ」

「まあまあ、アノ様とてもう旅を続けて長い。最近ではようやっと
野宿も慣れてきたようで何よりですよ」

いつもながらの不毛な駄話をはじめ二人をオルヴスが宥める。

「へえ、未だにオルヴスの事を使用人みたいにしてんのかと思ったけど」

「ああ、それは変わりませんよ」

「オルヴスっ！」

アーノイスが赤面して立ちあがる。野宿でも寝られるようになったとはいえそういう環境の変化にも身体がすぐに慣れてくれるようになったというだけであった。

「それは貴方が私にさせないからっていうのもあるでしょ！……まあ、その、確かに私は不器用だけどやればできるわよ！」

「炊事洗濯買物その他雑務は全て僕の仕事の一部ですからね。仕事を取られてしまったては立つ瀬ないわけですよ」

オルヴスの、擁護しているのかどうなのかわからない言い回しに、グリムはただ興味なさそうに欠伸をしていたが、ふと気付いたように顔を上げた。

「なあ、家事全般は全部オルヴス任せなんだよな？ 洗濯とか」

「さっき言ったでしょ。悔しいけど、そういう事ね」

「じゃあ姫様のパン」

「オルヴス」

「はい」

「ぶべっ！」

何かを口走ろうとしたグリムの顔面に、主人の許可を得たオルヴスの拳が飛ぶ。容赦のない一撃はグリムを椅子から転げ落ちさせるには十分過ぎた。

「ぐおおおお……オルヴスてめえ、こういう時だけすぐに手え出しやがってえ……卑怯だぞ」

あまりに素早い奇襲にもろに喰らってしまったらしいグリムは顔面を押えて床を転がる。

アーノイスは既にそっぽを向き、オルヴスは虫けらでも見る様な冷やかな視線でグリムを見下ろしていた。

「大丈夫ですかグリム？」

「効いたぜこん畜生……だが、無事だ」

「ちっ」

「ちよ、おまつ、今舌打ちしやがったなオルヴス！」

にこやかな表情を崩さないままのオルヴスに、一挙動で立ちあがったグリムが食ってかかる。しかし、反応はごくごく冷やかなものだった。

「死ぬば　いえ、せめて記憶が人格を失えば良かったなんて、これっぽちも思っていないですよ？」

「いや、ホントすみません。反省してます。反省してまーす」

「……オルヴス」

最後のやる気のない謝罪が気に入らなかつたようで、再度オルヴスに指令を出すアーノイス。

「はい」

「ちょ、待つ、やめろ！ わかつた！ わかつたから！ いやマジすみません、ごめんなさい！ もう二度と言わないって！」

席を立ち、指の骨を鳴らしながら近づくオルヴスと土下座しながら後退するグリム。

そこへ、お茶の準備を終えたらしいクオンとユレアがやってきた。

「おや、何やら楽しそうですね」

「あははっ、剣士のお兄ちゃんそれどうやって動いてるの？」

「これはすみません。お見苦しい所をお見せしてしまって」

グリムを追い詰めるのを止め、カップを並べるのを手伝うオルヴス。その隙を突き、グリムは席に戻った。

願い

「それでは、十日も前からフェルが近くに棲み付いていると？」

ユレアらが淹れた紅茶を飲みながら、オルヴスはクオンに、この村に出没しているというフェルについての詳細を聞いていた。

グリムはユレアと何やら談笑しているし、アーノイスはその双方の中間にあつて時折視線をオルヴスやユレアの方に向けながら、カツプを傾けている。

「ええ。奴等は森の何処かに身を潜め、夜になると村の方へと降りてくる。今はまだ村に張つてある結界が持つていますが、それもいつまで持つか……」

クオンは沈痛な面持ちで俯き、そう語った。

「結界……この村には霊呪術を扱える方が？」

「結界の方は一応私が。扱える、という程ではありませんがフェルからこの村を何とか匿う程度の物は仕上げました」

霊呪術とはその名の通り、霊術と呪術を組み合わせたもので、呪術のように刻んだ印に霊力を注ぎこんで現象を起こす術の事を言う。しかし霊呪術は定義が広く、それだけに留まらないのだが。単に呪術を使うよりも単に霊術を使うよりも、それは高度な才能を要求する。

「成る程。通りで、この村には匂いがしないわけですね」

オルヴスの要領を得ない物言いにクオンが疑問符を浮かべる。それに気付き、オルヴスは笑って説明した。

「ユレアちゃんと出会った時、僕は彼女の話す村の気配を探りました。人が集まっていれば、そこに霊力が集まっている匂いを感じる事が出来る。でも、それが感じられなかった。それはつまり、その村は存在していないか、隠されているか。どうやら正解は後者だったみたいです」

クオンはそれを聞いて感心していた。

「流石、鍵乙女様に選ばれた従盾騎士様だ。霊力の匂い、ですか。確かに言われてみればわからなくもないが、意識したとしてもはつきりなんて私にはわからない。いやあ凄いな」

「貴方も霊呪術を扱えるなら、感覚さえわかれば感じ取れるようになると思いますよ」

言葉を切り、カップの中身を飲み干すとオルヴスは、さて、と腰を上げた。

「アノ様、グリム。フェルの居場所が掴めました。早々に片付けてしましましょう」

オルヴスの宣言を聞き、それまでユレアと戯れていたグリムが立ちあがる。

「よしてきた！ さーてえ、齒応えのある奴はいるかなあー」

「遊びじゃないのよグリム……って言っても無駄よね」

苦言を呈しながらもアーノイスも席を立ち、カップを置いた。

「鍵乙女さまたち……もう行っちゃうの？」

既に出発の準備は出来たと言わんばかりの三人に、ユレアが寂しそうな声音で聞く。

「うん……私達はね、ユレアちゃんのように私達の助けを待っている人がいるから。だから、行かなきゃならないの」

少女の前で屈み、言い聞かせるようにその小さな頭を撫でるアーノイス。

そうして離れようとする、が。その腕は小さな両手に掴まれて引き留められてしまった。

「ユレア、鍵乙女様の邪魔をするんじゃない」

クオンが叱りつけるも少女はただ首を横に振るだけ。

アーノイスは掴まれてしまった腕を振り払う事も出来ず、どうしたらいいか困り果ててしまった。

「すみません、両親が早くに他界してしまって、私あまり相手をしてやれないが故に我儘に……。ほらユレア、手を離しなさい。鍵乙女様が困っているだろう？」

二度目の叱責。しかしながら少女は手を離さない。両親を知らないが故の寂しさが、彼女をそうさせるのだろう。

「……仕方ありませんね。アノ様はここに残っていてくださいます

か？」

その様子を見て仕方ないと判断したのか、オルヴスはそう進言した。彼としては主たる鍵乙女の意志を尊重したいが、このままでは埒が明かないとの判断だ。

「え、でもオルヴス……」

「グリム」

躊躇いを見せるアーノイスを余所にオルヴスはグリムへと声をかける。

「いつてらっしゃいませ」

「はっ、そー来ると思ったぜ。お姫様が動けないんじゃ、お前が動く筈ねーもんな」

彼の意図を理解していたグリムはいつものように悪態をつきながらも、意気揚々と扉の方へ向かう。

「フェルの探知くらいなら貴方でも出来るでしょう？」

「なめんなっ。あいつらの気配くらい小物一匹のがさねえっての！ そんじゃ後でなユレアちゃん。鍵乙女のおねーちゃんに目一杯遊んでもらいな」

言って、グリムは一人家を出て行った。

「い、いいのですか？ 彼一人に行かせてしまって」

予想外の展開に戸惑うクオンが何とかそう言葉を発する。

「大丈夫ですよ。振る舞いは雑ですが腕の方は確かです。それに彼は事戦いに関してだけは異様に頭が切れる。もし何かイレギュラーがあってもヘマはしないでしょ？」

質問に答えながら、オルヴスは再び椅子に腰かけた。

「すみませんが、お茶のお代わりをいただけますか？」

「あ、ああ、はい。今お持ちしますね」

要求されてキッチンの方へ行くクオン。それに入れ替わるように、今度はアーノイスがオルヴスの前に立つ。片腕はしっかりと少女に捕まっていたままだが。

「ちよつとオルヴス、グリム一人に行かせて良かったの？」

掲剣騎士にフェルの討伐へ行かせる。形としては間違っていないが、引き受けたのが自分である為、何処となくバツが悪そうなアーノイス。

「アノ様こそ。ユレアちゃんを引き剥がして行っても良かったんですか？」

「それは……」

そんな彼女にオルヴスはいつも通り笑って言葉を返す。

「『鍵乙女に言葉は要らず。彼の者は心の声のみを聴き、その願いを叶う』。教会の聖書の一節でしたね。今回のそれにふさわしいと思いますか」

しかしながらアーノイスはまだ煮え切らないような顔をしたまま。オルヴスは一つ溜息を吐くと、ユレアには聞こえないようアーノイスの耳元で囁いた。

「貴方が此処に来ると言ったのはフェルを倒す為ですか？ それとも少女の願いを聴きいれたからですか？」

それだけを告げてオルヴスは席に戻る。丁度クオンが新しいお茶を淹れて持って来た。

「あの……鍵乙女さまっ」

黙りこんでしまったアーノイスの手をユレアが引く。

「どうしたの？ ユレアちゃん」

固くなってしまった表情を何とか和らげて少女の方へと向き直る。そんなことにも気付かない様子のユレアは笑顔で彼女に言った。

「一緒にお風呂入る！ 剣士のおにーちゃん、フェルなんかマツハでやっつけるって言ってたもん。きつとすぐ帰ってくるよ」

「マツハ……ね。そーね、うん。えーっと」

「あまり広くはないのですが……それでよろしければ」

浴室を使う許可を得ようと言葉を選ぶアーノイスにクオンが先だつて答える。

「お風呂はこつちだよおねーちゃん！」

兄の許可も得て元気が出たのか、狭い家の中を走り始める少女。

「あつ、ちよつと、そんなに引つ張らなくなつて大丈夫　きゃっ」

「ユレアー、ちゃんと浴槽を洗つてからお湯淹れるんだぞ」

「はい」

クオンの言葉への返事はもう既に壁を1、2枚過ぎた声だった。

「すみませんね。お茶も出して頂いているのに」

相変わらずのペースでお茶を啜りながらオルヴスがそう言う。

「いえ、フェルの討伐なんて無茶を頼んでいるのに、その上妹の我儘にまで付き合っていただいて……何だか申し訳ないくらいですよ」

クオンは苦笑いで頭を掻くのがだった。

印

「えーっと、どうしよう」

クオン、ユレア兄妹の家の浴室。その脱衣場で、アーノイスは一人途方に暮れていた。

ユレアはというと、「おねえちゃん早く来てねー！」といつの間にやら服を脱ぎ捨て、早々に浴室へと消えてしまった。

アーノイスも了承はしたものの、ある事情により未だ衣服を脱げずにいる。

彼女は元々れつきとした皇族であり、着替えや風呂に至るまで世話役が側に居た事もあって、同性の前で裸になる事が別段恥ずかしい事ではない。それも相手は自分より一回り以上年下の少女である。

これが少年であればオルヴスに任せられた所なのだが、そうするわけにもいかず、流されるままに承諾してしまったのだ。

「ふう……仕方ない、わよね」

一呼吸吐き、身に纏っていたワンピースをはだける。純潔の真白い肌が顕わになる、と同時。その白い腕、足、身体に絡み付く赤黒い「紋様」が認識出来た。

これが、彼女が躊躇っていた理由。鍵乙女の烙印。門を開く為の鍵そのもの。通称「アウヘンシス世鍵」。世界にあらゆるものの開閉を自在とするその力は、神が与えし力だと言われている。過去の文献などにも烙印の紋様は確認されておらず、また知っていたとしても通常の霊呪術のように操る事が出来た人間は皆無で、何の力も発揮しないただの模様にしかならないのだ。

アーノイスがこの烙印がされた裸体を人目に晒すのはこれが三度目。

一度目は、幼いある日、突如この烙印がなされた時に妹と母に。二度目は、教会の“巫女”に鍵乙女であるという照明をする為に。そして、今。

考え過ぎと言えはそうかもしれないが、それでも、彼女はこの身体を他人の眼に晒す事に抵抗があつた。紋様は美しくも禍々しさも内包している形、色。

世界には己に靈呪術をかけ、力とする術もあると聞くが、そんな人間は彼女の知る限り一人だけで、その人物も今は彼女の心の中にかいない。

「君は、どんな気持ちだったのかしらね。チアキ……」

最後にそう呟いて、アーノイスは浴室へと入っていった。

「おねーちゃん遅いよー！」

既に浴槽に浸かっていたユレアが膨れた顔をする。

「ごめんごめん。そーだユレアちゃん、こっちおいで。おねーちゃんが髪、洗ってあげる」

椅子を前に出し、ユレアを誘うアーノイス。少女はすぐに笑顔でその椅子に座った。

「シャンプーは、これね」

手にシャンプーをつけ、ユレアの髪を優しく洗い始める。

「ふーんふふーん」

鼻歌を歌いながら、上機嫌に足を踊られるユレア。

「私ね、妹が居て、ペルネっていうんだけど、昔はこうしてよく髪
の洗いっこしたのよ」

懐かしそうに目を細めながら手を動かす。

「鍵乙女さまの妹かあ、どんな人なの？」

「んーとねえ……すっかりもので、なんでも出来て、それですつこ
く可愛いだよ。料理も上手で、特にお菓子作りはうちのパティシエ
が困るくらいだったわ。さーて、そろそろ流すわ。ユレアちゃん息
止めてるのよー？」

言って、桶のお湯を被せて洗い流す。ユレアは小動物のようにぶる
ぶると頭を振って水気を飛ばすと、アーノイスの方へ向き直った。

「今度は私が洗ってあげるね！」

椅子を渡し、シャンプー片手に立ちあがる。

「それじゃあ、お願いしましょうか」

少女の申し出を断るわけもなく、アーノイスは椅子に座った。

「おねーちゃんは髪もきれーだね。あれ？ おねーちゃん、この赤くて黒いのなーに？」

小さな手で一生懸命アーノイスの長い髪を洗う最中、少女は烙印に気付いたようでそっと指で触れる。

「ひゃんっー！」

「わわっ、ごめんなさい！」

いきなり背中に触られて驚いたのか、悲鳴をあげるアーノイス。それに合わせてユレアもびっくりして謝った。

「ごめんね、ちょっとびっくりしただけだから。えっと……これはね、鍵乙女の印、なんだってさ」

「しるし？」

心の苦しさをアーノイスは表に出さないよう必死に声を絞った。この紋の異様さは誰よりも自分が一番よく知っていた。

「それとね……私の約束の形、でもあるんだ。約束って言っても、誰かとしたわけじゃなくて……いや、私としてはしたんだけど、うーんなんて言うかな」

全てはある幼き日の出来事。その出会いがなければ日々がなければ、自分の約束がなければ、今こうしていなかったかもしれない。そう、アーノイスは思い返す。

「鍵乙女さまの、大事なものなんだね」

そんな心の内を感じ取ったのか否か、わからないがユレアはそう口にした。

「そうね。今の私にとって、一番大切なのよ」

その言葉の端はどこか痛々しく、悲しげに聞えた。

炎舞

「フェルちゃんフェールちゃんっ、どっここかなあ」

その頃。フェル討伐を一人で任されたグリムは村の奥の森の中を探索していた。

意気揚々と己が大剣を振り回して闊歩する姿は、不真面目で不謹慎だが、本人は至って本気である。

誰よりも強く、何よりも強く、そうありたいと願う彼はその理由を「その方が楽しいから」と答える。強くなればもつと強い奴と戦える。彼はそう言い、故に度々、自分よりも強いと唯一認めているオルヴスに突如襲撃をする、なんて事も彼の中では不思議でも可笑しくもなんともない。

「おっ、この匂いは」

何かに気付いたらしく、今度は走り始めるグリム。そして、そのまま一本の大木の枝に飛び乗ると、視線を下方に巡らせあるいつてんで止まった。

「目標発見、てな」

まるで宝物を探し当てたかのように口元を歪ませる。その目にはフェルの一段が写っていた。

1mはあるつかという暗い青緑の体軀をした蜘蛛の姿をした群れ。その中心には熊とも獅子とも取れない、四速の巨大な獣が座り込んでいる。大きさは頭から尾までで10m、肩の位置は7m程だろうか。全身は燈赤の針のような毛に覆われ、尾は蛇のようで太く長い。目は赤、口からは紫の牙が除いている。

フェルの強さは基本的にその大きさを目測出来る。その場にいる蜘蛛程度の大きさ一匹で掲剣騎士一人と言った所。しかしながら中央に座す獣はもう大きさでは判断できないところまで成長している。フェルは喰らった命の数だけ強大になると言われ、ものによっては一体で国をも簡単に滅ぼすという。

「ひい、ふう、みい……あ、面倒くせ。取り敢えずちよいちよいるな。ちよいちよい」

フェルの数を数えていたらしいが途中で投げ捨て、立ちあがって大剣を肩に担ぐ。

小さなフェルが巨大のそれに近くに集まるのは不思議な事ではない。弱い存在は強い存在の庇護下になりたいと思うのはごく自然な事である。だが、彼らが他の動物らのようにそこで社会を形成しているのかは謎だが。

「あのデカイのは最後にとっておくとして……ま、取り巻きからやつちまましてうかね」

グリムの姿が枝の上から消える。

「グリム・ティレド、行くぜえええ！」

続き、天から絶叫。解放した霊力が火炎となりグリムを包む。そのまま、地表目掛けて落下した。

落下点の周囲に居た数体の蜘蛛が一瞬にして蒸発し、白い光の粒子が空へ逃げて行く。フェルは死んだとしても軀を残さない。光となつてただ空へと還るだけだ。

突然の襲撃者にフェル達は一步後ずさるも、それが人間 生命体だと認知するとすぐに牙を剥き出して金属が擦れるような声を上げた。その中で一際、燈赤の獣が大地を震わせる咆哮を放つ。

「まあ待てよ。お前は後回しだつつの。まずは前座！ 行ってみようか！」

獣の咆哮に促されたように数体の蜘蛛がグリムへと飛びかかる。同時、炎の塊がそれらを“轢いた”。一瞬にして獣の横を通り過ぎ、背後に回る。炎が解け、剣を担いだグリムの姿が顕わになった。先程居た場所からそこまでに、一本の灰の路が出来あがっている。

「遅すぎるぜえ、お前らちゃんと動けよなあ……でない」と

グリムの足元に再び業火が巻き起こる。瞬く間にそれは彼の身体を包み、まるで焔の鎧を作りあげていた。

「すぐに消し炭になんぜ！」

閃熱が駆ける。恐れを為さず飛びかかった蜘蛛が、グリム本体に触れることすら敵わず蒸発した。

急停止、急加速。その二つを繰り返し、フェルごとその場一体が焦土と化していく。フェルは引く事を知らないのか、次々とグリムに襲いかかって行くも、その全てが次の瞬間には跡形もなく消え去っていく。

「おらおらどうした！ 楽しませろよお、弱い物いじめは趣味じゃねえんだが……っ！」

あくまで直進を続けていたグリムが突如後ろへ飛び跳ねた。そこへ振り下ろされる巨大な四指の鉤爪。

「ちょ、待つ、危っねえー。なんだよ、我慢しきれなくなったのか？」

火炎の鎧の一部を解き、眼前の自分と同じ色の瞳を見つめるグリム。彼が避けたその場所は獣の手により大きく破碎され、地割れが彼の足元まで及んでいた。

「だから待ってって言っただろ？　まずは前座の蜘蛛ちゃん達から……ってあれ？」

辺りを見回す、がそこに既に小型のフェルの姿は一匹もなく、残りには眼の前の獣のみとなっていた。

「なんだよ、ちょっとジヨギングのつもりだったんだけどなあ。ま、仕方ねえか」

言って、戦闘はじまって以来、グリムがはじめて構えを取る。大剣を右手に肩に担いだまま、腰を落として左手を前に翳し、標的を睨む。

一方フェルも姿勢を低く保ち、いつでも飛びかけられる体勢に移っていた。

「いいねえ……百か？　二百か？　お前が喰った靈魂の数だよ。まあいくらだっついていいさ。その分、俺様が楽しめる」

グリムの眼が爛爛と獣を睨む。闘争本能に染まり切った色をしてい

た。

音が鳴る。グリムの飛び火で燃えた樹が割れる音。それが、合図に
なった。

激突するフェルの爪とグリムの大剣。その衝撃と剣に込められた爆
炎が辺りを包みこんだ。

急襲

「そういえばオルヴスさん。貴方は何故従盾騎士に？」

グリムが戦闘をはじめめる数分前。

アーノイスとユレアが風呂に行っている為、オルヴスとクオンは大の男二人がお茶を啜っているという何とも侘しい事になっていた。

「何故？ とはまた難解な問題ですね。鍵乙女は世界の要。それを唯一直接守る存在が従盾騎士です。世界の殆どが教会の教えを信じている中、そんな大役に憧れるのは普通の事ではありませんか？」

自嘲気味に笑いながらオルヴスは答える。その答えに、クオンは可笑しそうに笑う。

「憧れる、ですか……確かに従盾騎士というのは大きな名誉ですよ。腕に覚えのある者なら、あるいは英雄を夢見る少年なら、皆がこぞって目指すでしょう。でも私には、貴方がそのどちらでもなく見え、また貴方が鍵乙女を守りたいと思っっているようには見えない。今の答えもそうです。貴方は鍵乙女ではなく……アーノイス様を守りたいのではないのですか？」

クオンの穿った言葉にオルヴスは笑みを崩さなず、また返答もしなかった。その無言が肯定なのか否定なのか、はたまたそのどちらでもないかはクオンも測り切れなかった。

「鍵乙女様は本来、門を巡る旅をするのをまず第一にし、それ以外の補佐。そう、今回のように民衆が求める助けの為に教会があるのでしょうか？ まあ、この村に教会はありませんから、私達に実感は

ないのですが……。それでも、世界がそういう仕組みなら、いくら直接頼まれたとはいえ、こんな小さな村に足を運び、あまつさえ村人の少女の願いまでも聴いてしまう。教会には鍵乙女という存在からさらに“女神”なるものまで存在していると教えがあるそうですが……」

「アノ様の行動がおかしいと？」

話しの続きをオルヴスが引き継ぐ。しかしその台詞をクオンは笑って否定する。

「違いますよ。最も、つい先程まで私は鍵乙女様というのはもっと機械的というか……私達とはまるで違う未知の存在だと思っていました。実際にお会いしてみたところ、基本的には私達とそう変わらない人間に思えます。だから、頼まれごとを引き受けるのも、少女の我儘を聞き入れてくださるのも、おかしいとは欠片も思わない。変だとすれば、どちらかといえば貴方の方ですかね」

クオンはあくまでオルヴスの方に話しを持って行きたいらしい。目の前に従盾騎士という世界に一人しかいない人物がいれば当然の反応とも言えなくもない。

「鍵乙女としての彼女の意志は今グリムさんがお一人で行かれたフェルの討伐の方になりました。しかし、貴方はアーノイス様自身の意志を確かめた上で現在の措置を取った。そこが少し気になったけですよ」

言葉を切って、彼はお茶を口に運んだ。

「良く見ていますね貴方は。まあ、そうですね。僕の事に関しては

「ご想像にお任せします、とでも言っておきましょうか」

クオンの鋭い言葉に対してもはつきりとした返答も態度も示さず、オルヴスは受け流す。そう言われては仕方がない、とクオンも諦めたよう。

「それにしても、グリムさんは大丈夫でしょうか……フェルは一体でも戦いの術を知らない人間たちでは相手にならない。ましてや、あの森にはフェルが群生している。そんなところにお一人でなど」

「グリムは強い。元々持つ強大な霊力に加え、特異な体質まで持ち合わせている。精霊クラスのフェルでもない限り死にはしませんよ」

言って、オルヴスはカップを口元へ運ぶ　否、運ぼうとして止まった。

「どうかしまし　うわっ！」

大きな地震が起きたと思われる程の揺れがクオンの言葉を遮る。カップが音を立てて揺れ、紅茶が零れる。

「なにっ！？　どうしたの！」

風呂からあがってきたアーノイスとその足にしがみつくユレアも驚いた表情で窓の外に何かを探す。そんな中、揺れがおさまったのを確認し、一口お茶を飲んだオルヴスが何でもないと言うように答えた。

「グリムが戦いはじめましたね……それと」

オルヴスの視線が窓の外を眺め、そしてクオンへと移る。彼は絶望した表情で顔を抑えていた。

「フェルが村の近くまで来ていますね。結界が見破られましたか」
それだけ言つてオルヴスは席を立つ。

「アノ様はお二人をお願いします。数体が近くにいますが、まだ村には入つて来ていないようです。僕が片付けてきましょう」

「おにーちゃん……」

事態の重大さを感じ取つたか、ユレアが兄の元へ近付く。クオンは額に脂汗を浮かべたまま、無理矢理笑顔を作つて妹の頭を撫でた。

「大丈夫さユレア。鍵乙女様に従盾騎士様がいるんだ。何も心配は要らないよ」

クオンにしがみつくユレア。

普通の人間ではフェルに太刀打ちできない。小さいものが一匹ならまだしも複数。村の近く、となれば出来る事は隠れるか、逃げるか。

「待つてオルヴス、私も」

守らないと。そう思ったアーノイスが振り向いたが、そこに既に従者の姿はなく、不法法に開け放たれたままの扉が小さな音を立てて揺れているだけだった。

魔狼

「これは……なかなかの大きさですねえ……」

村はずれの一角。フェルの気配を感知したオルヴスは単身、その眼前に立ち尽くしていた。

彼の前に立ちはだかるは四体の巨人。足や腕は大木のそれよりも遙かに太く、頭は天に届こうかという程。その頭頂には各々一本なり二本なりの角が生え、頭髪は一切なく、肌は青銅、双眸は丸く孔のように白く瞳がない。手や足の先には人のものとは思えぬ爪が生え、全身に黒褐色のボロ布のようなものが巻かれていた。巨大な鬼。一言で表すならそれが最も正しいと思える。

「まあ、何でも良いですけどね」

鬼は既にオルヴスに気づいている。それでも尚、彼は普段の様相を崩さず、静かに標的を見据えた。

次の瞬間、鬼の一体が大きく吹き飛ばされ、倒れる。先程までその鬼の顔面があつた場所に、黒い影　オルヴスが立っていた。霊力を足場として固め、立っているのだ。

「ふむ……この程度では割れませんか」

右の拳を握り開き、感触を確かめるように呟く。それを隙とみた他の鬼の手が彼を捕えようと伸びる、が。それらは全て虚空を掻いた。オルヴスの姿は既に倒れた鬼の顔面の上であり、先程の攻撃など何事でもなかったかのよう。

右腕を引き、拳を作る。手には淡い光を纏わせ、視線は足元の鬼の

眉間へ。

「まず一つ」

振り下ろされる拳。粉塵が空を覆う程に舞い上がり、地面が陥没する。鬼の頭は脳漿ごと飛び散り、その身体は光の粒子となって天へと帰った。

「おっとこれは……やり過ぎましたね。村が無くなってしまいました」
瞬間で移動し、元に鬼と相対していた場所に戻る。

「オルヴスー！」

と、背後から声。

「アノ様？ 何故ここに」

戦闘中である事を意識していないのか、普通に振りかえるオルヴス。アーノイスはクオンの家から全力で走ってきたのだらう。息が上がっており、肩で呼吸をしていた。

「何故じゃないわよ……全く、貴方がフェルなんかと戦ったら周りが、って、オルヴス危ない！」

砂塵の向こうから二人に迫る影。視界を埋め尽くす程の大きさの腕がオルヴスを叩き潰さんと襲いかかる。

オルヴスはそれを振り向きもせず片腕で止めて見せた。生じる空気の圧に吹き飛ばされそうになったアーノイスをもう片方の手で捕まえて引き寄せる。

「大丈夫ですか？」

「う、うう……全くもつ……ほら見なさい！ 貴方が戦うと周りが大変になるのよ！ いい、すぐに隔離するから！」

宣言してオルヴスの腕を離れるアーノイス。そして。

「隔绝せよ！ 風を絶ち、地を隔て、世界を閉じよ！ パレート・オフェリア！」

オルヴス、フェルらの足元に突如刻まれるタウ十字型の閃光。それらの頂点が結ばれ、立ち上る光の壁が天の果てまで昇った。薄い光の膜がオルヴス達を“隔離”している。

「これでよし……。さっさとやっちゃいなさい！ オルヴス」

鍵乙女の烙印はあらゆるものを開閉する力を持つ。これは、己が指定した範囲の空間を他の空間と隔绝し、閉じる術。その証拠なのか、自らに刻まれた烙印の内、左腕の印を仄かに光らせるアーノイス。服の上からでも十分にわかる光だが、門での儀式の際程ではない。

「ええ、勿論ですよ」

だが鍵乙女の業は強力であるが故に心身への負担が重い。それを知らぬオルヴスではなかった。

「少し、本気でお相手させていただきますよ」

鬼の方へ向き直り、いつも崩さなかつた笑みを消すオルヴス。同時に彼の周囲の大气が歪む。そして、その歪みから生まれ出ずる漆黒の、炎とも水とも風とも取れぬ不定形の黒く濃い霧。それは一瞬の内にオルヴスの姿を包み 霧散した。

中から現れたのはオルヴスその人、の筈であるのにその姿はつい先ほどまでの彼とは似て非なる存在。

背中まで伸びたたてがみの如き、逆立つ銀の髪。肌は闇よりも黒く変色し、指の先には深紅の鉤爪。両頬には白い逆さ十字の刻印が浮かび上がり、目は満月をはめ込んだかのような黄金色をしていた。

「……魔狼」

その様子を遠目で見ていたアーノイスが思わず呟く。何者にも屈せず、与せず、ただ唯一、己の意志でのみ彼女に着き従う孤高の存在彼のその姿を知る教会の人間には“魔狼” そう呼ぶ者も少なからずいる。見る者の畏怖を刻みつけ、敵と認識された存在は二度とその姿を現す事はない。

三体の鬼が、銀灰の魔狼の放つ威圧感を感じ取ったか、地を震わす咆哮を上げた。

音圧で地面が割れるような隔離世界の中、オルヴスの姿が消える。声が、途切れた。

アーノイスの眼にはオルヴスが消えたその瞬間から気付かなかつた。見えたのは、隔絶された空間の向こうで、三体の巨人の内の一体が消滅するその光景だけ。

いくつにも寸断された鬼の両腕両足胴体頭部。どうやったのか、なんてはじめて魔狼を目の当たりにしたアーノイスは聴いたものだが「爪で切っただけですよ」なんて当然のように青年は応えており、

それ以降彼女は彼の強さについて疑問を持つのをやめた。

彼がそうしたのだから、そうなのだ。それしか彼女にはわからない。残り二つの鬼の背後に現れたオルヴスは、無造作に静かに、右手を左胸の前に翳した。

空間に突き立てられる五指の爪。硝子か何かに爪を立てた時と似た不快音を鳴らしながら、ゆっくりと爪が虚空を裂く。

刹那の間を挟み、彼の眼前が“分断”する。それはそこに立っていた筈のフェルも関係なく、閉ざされた世界の中をただ六つに断ち切った。

為す術もなく千切れ崩れ、空へ帰るフェルを見て、アーノイスは術を解いた。

術を行使した反動でふらつき、地面に転びそうになるも、その身体はいつの間にか傍らに辿り着いていたオルヴスの手に支えられていた。

「あ、ありがとう……」

いつの間に魔狼の姿から戻ったのか、顔を上げたアーノイスの前にいるのは、いつもの笑みを浮かべた彼女の従者の姿であった。

「いえ。アノ様こそ。わざわざ術を使っていたりなど……お手数をおかけしてしまって」

「いいのよ。大体、結界もせずにあんなのされたら私が巻き添えで死んじゃうわっ」

体勢を整えるのに取っていた手を話して毅然と言い放つアーノイス。少々の無理は押しているが、ずっと彼の手に支えられたままなのは

恥ずかしい、というのが本音である。
それをわかっているのかいないのか、オルヴスは辺りを見回しはじめる。

「……静かですね。グリムの方も終わったのでしょうか」

「さあ？ そのうち戻ってくるでしょ。さ、ユレアちゃん達のところに戻りましょう」

そう宣言して早々に歩を進めるアーノイスにオルヴスは数歩遅れてついて行った。

異変

一仕事終えた故の達成感からか、アーノイスは何処となく上気した顔でユレアの家の前まで来ていた。

それに対し、オルヴスは彼女の後ろで顎に手を当てて何か考え事をしている。彼の感知能力はまさに狼の嗅覚の如く敏感で、探知可能な範囲も常人のそれとは格が違う。

故に、本来ならば村にフェルが片足を突っ込む前にその存在を感じ取る事が出来るのだが。今回はそれが出来なかった。気を抜いていたわけではない。かといって結界のせいかと問われるとそうでもない。事実、結界の外で戦闘を始めたグリムの霊力は知れたのだ。人間やその他の動物と違い、自分の霊力を制御せずに垂れ流しにしているフェルの存在を見紛う事など、これまでオルヴスには経験がなかった。

「……………」

そんな彼を無言で見つめるアーノイス。

視線に気付いたオルヴスが、笑顔で相對する。

「どうかありませんでしたかアノ様？ 黙ってこちらを見つめたりして」

「べつ、別に見つめてたわけじゃないわよ！ ただ……貴方今日ちよっと変じゃない？」

冗談めかした、いつものおどけりにも素直に反応してしまうアーノイス。いつものように微笑の煙に巻かれるかと思いきや、今回はそうではなかった。

息を一つ吐いて真剣な眼差しを向ける。

「おや、気付かれましたか」

当然、とでも言うように腕を組み自分の従者を睨んだ。

「何？ なにか気にかかる事でもあるの？ 言ってみなさい」

話を聞いてあげる、なんて優しさのある雰囲気は微塵もなく、自分がこうして気付いているのに秘密にするなんて許さない。そんな台詞が聞えてきそうな形相であった。

「やれやれ……敵いませんね」

流石に観念したのか、オルヴスが苦笑混じりに口を開く。

「いえ、少々違和感のようなものを感じただけですよ。フェルの存在を意図的に隠されているような……そんな、ね」

「クオンさんの結界の力じゃなくて？」

「それでしたらグリムの霊力も感じられない筈です。だが、彼の炎の匂いは感じられる。アノ様にもわかると思います」

目を閉じ、少しの間をおいてからアーノイスは頷いた。

「そう、ね……でも、ここで話しても仕方ないわ。そうでしょ？」

少し逡巡する様子も見せたが、ふっ切つて家の扉に手をかけるアーノイス。彼女とて気にならないわけではないし、むしろ質問を投げかけたのはアーノイスなのだが、そこはそれ。主従の主であるが故

に彼を引つ張って行くという意志の表れでもある。

それをオルヴスも感じ取ったのか、何も言わず、彼女の後に着いて行こうとし 駆けた。

「下がってくださいアノ様！」

突然眼前にオルヴスが現れるのは慣れがあるとはいえ、尋常ではない雰囲気の中で平穩を許さない。

息を呑み、言われるがまま扉から手を離して数歩後ずさるアーノイスを確認し、オルヴスがドアを蹴破った。

「っ！」

オルヴスの肩越しに室内の様子を垣間見たアーノイスが、声に鳴らない悲鳴を上げる。

朱。赤。そして黒。

木製の柔らかな家の質感など、そこには欠片も残っていなかった。彼等が先程までくつろいでいた筈の空間を染め上げる色は、血、肉、死の色だった。

「馬鹿な……」

オルヴスが驚愕の声を上げる。その黒い瞳に写るのは青紫色の豹に似た化物。無情な鉛色をした双眸、その下の鋭利な牙の羅列に貫かれているのは、紛れもなく、彼らをここに誘った少女の、首。もはや食い散らかされた後だったのか、首から下はもはや、確認出来る形では存在していない。豹の顎と前足に生々しく残る血だまりに恐らくは肉片と思われる何かが散在、もしくは小さな肉塊として転がっているのみだ。

飽きたのか空腹を満たしたのか、豹は死に首をオルヴスらの方へ無造作に投げ捨てる。為すがままにゴロゴロと彼の足元まで転がってくる様はまるで作りの悪いボールの様。

アーノイスが恐る恐る覗き込んだ“少女”は、恐怖と絶望の表情を凍りつかせた瞳を彼女に向けていた。

アーノイスは震えた。人の死を見るのはこれがはじめてではない。だが、それでも何度そんな場面にあっても、慣れる事は彼女には出来なかったからだ。ましてや、自分を頼ってくれた少女の。固まる身体を、戦慄く唇を、アーノイスはゆっくりと動かす。

「……………ダイエ……………」

「アノ様！？」

「下がりなさいオルヴス！」

悲鳴にも似た叫び。だが、その声は震えていて尚、有無を言わさない噴気を放っていた。

「……………ダイエ・オフエロア……………」

紡がれる言霊。呼びかけに応じ、鍵乙女の烙印が光を放つ。

光が彼女の身体を離れ、九つの光球となり、扇状に展開された。

「消えなさい！」

紫の獣を見据え、右手を翳す。九つの球体は各々を光条として発し、標的を一瞬の内に包み込む一本の光流となり、貫いて尚突き進む。前方にあった標的を家屋ごと消し飛ばし、地を抉り、木々を消失さ

せる光の矢。

光の放出が数秒程続いたと思われる頃、突如として光は消え、アーノイスはその場に膝を着いた。

「はあっ……はあ、はあ」

先程烙印の力を使った時は比べ物にならない程憔悴した顔で、額には汗を浮かべている。

巻き込まれないよう退避していたオルヴスがその隣へと現れた。

「アノ様っ、大丈夫ですか！」

珍しく焦燥を隠さずにオルヴスがアーノイスに声をかける。

彼女は手を借りて立ち上がり、自身が消し去った前方の遙か先までを見るように目を細めた。

「やった……かしら」

「……ええ。アノ様のお力です」

オルヴスの言葉を聞いて彼女は再び崩れ落ちる。床に倒れないよう支えるオルヴスに、アーノイスは呟く。

「ごめん……オルヴス。ちょっと、休む、わ……」

そう言葉を絞り出し、彼女は意識を手放した。

火葬

「これで、最後ですかね」

村の中心となる広場。そこに一人立つオルヴスとその眼前にうず高く積まれた百体程の死体の山。それは全てこの村の家々から出てきたものだった。どれもまだ新しく、つい先程命をフェルに命を奪われたと思われる者達の骸。百体、とはいったがそれも概算で、中には原型が留められておらず一体として判別できなくなっただけのものも少なくなかったからだ。

「ふいー、全く、鍵乙女様の力っていうのはすげえな。やりすぎじゃねえか？」

オルヴスの背後からグリムがやれやれと言った様子で歩いて来る。フェル討伐から帰ってきた彼にオルヴスは、先程アーノイスが放った烙印の術がどこまで届いたかの調査を頼んだのだった。

「向こうの方の山が一つなくなってたぜ。フェルは一匹だったんろ？ お前がやった方がよかつたんじゃねえかオルヴス」

「貴方だつて森林に穴開けてきたでしょう。人の事言えた義理じゃありませんね」

「村の端っこ陥没させた奴に言われたくねえっつもの。まあ……そんな心配も時既に遅しってか」

やるせなさを吐きだすように唾を吐き、オルヴスと共に前方の死体の山を見つめるグリム。その視線にはこれまでのようにふざけた感

じはなく、少しの憂いを帯びていた。

「……僕のミスです。フェルの気配を感じ取る事が出来ないとは。気が抜けていたのかもしれないね」

オルヴスはそう言って、額を抑える。少女の頼みを果たしにここまで来たというのに、結果、その少女すら助ける事が出来なかったのだ。

「俺達、何をしにこの村に来ちまったんだかな」

そんなオルヴスより前に出て、死骸達の前でしゃがみ込む。

「こんなものしかなかったけど、ねえよりマシだろ」

言って、グリムはポケットから小さな一輪の赤い色が鮮やかな華をひとつ手向けた。

「アノ様にこれを見せるのは辛い。グリム、頼みます」

踵を返し、アーノイスを寝かせている馬車の方へ向かうオルヴスがそうグリムに告げる。

村の全ての人間が殺されていたというのに、自分達の馬車馬だけが死んでいなかったというのは、何という皮肉だろう。

「……ああ」

言葉を受けてグリムは立ち上がり、担いでいた大剣を地面に刺す。そこから走る火炎が地を走り、死者達を円形に囲む。

「ごめんなユレアちゃん、熱いだろ。せめて綺麗に葬ってやるから、少しだけ我慢してくれな」

立ち上る葬火。いつもグリムが起こす火の荒々しさはそこにはなく、ただ静かに、時折吹く風に少しだけ揺れる。誰が見ているわけでもないというのにその炎は厚く、空へ送られて行く死者達の最後の姿を隠しているようでもあった。

やがて遺骨までも灰と為し、グリムは火葬を終え、村の出口にて待つオルヴスの元へと戻るのだった。

「御苦労さまですグリム」

「やめてくれよ。俺は、何も出来ちゃいない」

「………そうですね」

振り向き、来た時とほぼ変わらない筈なのに暗く写る村を眺めるオルヴス。だがそれもすぐにやめ、馬車の手綱を引いた。馬が一声鳴き、その歩を進めはじめた。

「行きましよう。もう、僕達に出来る事はありません。彼らの靈魂が安らかに眠るのを願うだけです」

そう宣言するオルヴスにグリムは何も返さず、彼らは無人と化した村を後にした。

消失

オルヴス達が村から見えない所まで離れた頃。火葬が行われた現場に一人の男が立っていた。

長身痩躯で髪は短く、若草のような翠色をして、顔の半分を覆い隠す真鍮色の仮面をしている。

「あのクラスのフェルでは不足か……魔狼と謳われるだけの事はある」

深く、落ち着きのある声で独りそう呟く。

「ですが、カース・イヴォル呪印交霊を使っているようには見えませんでした」

その声にな女の声が反応する。男の周りには誰もいないのに、だ。

「もう隠れずとも良いぞ……ユレア」

呼びかけに応えるかのように、男の隣の空間が黒く裂け、巨大の鎌の刃が覗く。続いて、その鎌を手にした美女が現れた。先程までこの村に居たユレアと同じ名前、髪の色。だが、その姿は成年に達すると思われる女性のもので、左の眼には眼帯をしていた。彼女は持っていた鎌を片手で一度回し、再度裂いた空間の中にそれをしまいかむ。

「お前にも視えなかったとなると、本当に使っていなかった、ということか。恐ろしいな魔狼。して、あのグリムとかいう剣士の方はどうだった」

「詠唱もなしに火靈術を起こす力はかなりのもので、荒削りながら元来の靈力もかなり強いと思われます。術の方は己の靈力をそのまま火と為している、と私は見ました」

感情の消えたような表情と声で、淡々と言葉を並べるような話し方だ。

「その“眼”でか？」

言って、仮面の男はユレアを、その眼帯の奥を指差す。女はそれに頷きで答えた。

「ならばそうなのだろう。それにしても……ククッ」

喉の奥で笑いを押し殺してユレアを眺める。

「どうかなされましたか？」

変わらない精巧な人形のような顔で疑問符を浮かべるユレア。男は一つ嘆息して視線を逸らした。

「幼いお前も可愛らしかったが、やはり今の方が美しいな」

「お、お戯れを……」

てらいもなくそんな事を述べる男に、ユレアは頬を少しだけ染めて下を向く。

「それに加え『おにいちゃん』だものねえ、あなたのご主人様もイチコロだったかしら？」

と、二人の背後から一人の成熟した、眼鏡をかけた女性が現れ、さらにその背後には顎に髭を蓄えた壮年の大男。双子らしき砂色の髪をした少年と少女が手をつないで着いてきていた。

「貴様ら見ていたな。まあいい。首尾はどうだ」

女のふざけた調子にはあまり付き合わず、そう告げる仮面の男。

「ちゃんと見てきたよ！ えーつとねーボク達のところはおつきな門があつてー、そのすぐ近くですつと騎士が見張つてたよ！ ねー？」

「ねー！ あ、それとその前の街は検問が厳しかったの！ ねー？」

「ねー！」

質問には真つ先に双子が答えた。快活で騒がしい様子だが、男は別段気にした風でもない。ただその簡単な報告の内容を頭の中で推察しているようだった。

「ワシのところに騎士はおらなんだ。世界の護る“門”ってのは随分と杜撰な警備じゃのお」

続き、大男が簡素な説明をする。

「あたしの所も同じ様なものね。全く、か弱い女性をあーんな山奥に行かせるなんて。ご主人様つたら鬼畜じゃなーい？」

同じく眼鏡の女もそう答えたが、言葉を終えるか終えないかの間に、その細い首には鈍く光る刃が添えられていた。

音もなく現れたその凶器に仮面の男と鎌の保持者を除いた三人が驚愕する。

「主への愚弄は許しませんよ、ナツ」

氷のように冷たい殺気を帯びた台詞を放ち、いつの間にか手にしていた鎌の刃を一層近くナツと呼んだ女の首に近づけるユレア。

「止さんかユレア。おぬしは少々気を張り過ぎじゃ」

止めに入る大男。しかしユレアは今度はそちらに鎌の先端を向ける。

「私に命令して良いのは主だけです。それをお忘れなきよう」

その眼は冗談や虚勢は含まれていない。次に何か言えば問答無用でその刃を振り翳す、そんな気配を隠そうともしていない。

「ユレア」

しかし、その様子は彼女の“主”の一声でおさまった。すぐに鎌を闇へと戻し、主の前に跪く。

「はっ」

「お前の気持ちは嬉しいが、少しは我慢を覚えてくれ。良いな？」

「申し訳ありません」

仮面の男は薄く笑みを浮かべながらそれだけ言い、ユレアを立たせた。様子から仲間同士でありながらこの一触即発の雰囲気。リーダ

「とおぼしき仮面の男もそれはわかっているだろうに、特に責めた言い方はしていなかった。」

「やーれやれ。ユレアちゃんは口リっ子のまんまの方が可愛げがあったんじゃないー？」

「そう言うなナツ。ユレア嬢は心配性なだけじゃて」

「心が広いのねボーヴおじさんは。心配性って言うか、どっちかって言うとメンヘラでしょー。ま、そこが可愛いところでもあるし、だからこそいじりがあるのよねえ」

「やめておけやめておけ。お主じゃユレアにはどう足掻いても勝てまいて」

「自分なら勝てるでも言いたそうね？ お、じ、さん。まあでもやめとくわ。怒らせると怖いもの。怒られるのはあたしもやーよ」

「怒られるその前に切り刻まれるのがオチじゃて」

「うわーん！ ごめんユレアちゃん！ もついじらないから許してえ」

好き勝手にお喋りをはじめた二人だが、当の本人たるユレアはどこ吹く風で目を閉じ黙っている。そこへ双子が走り寄ってきた。

「ユレアさんユレアさん」

「ユレアさんユレアさん」

同時に呼びかけられ、ユレアは腰を落として双子と視線を合わせる。

「どうかした？」

纏う雰囲気は冷静平然としたままだが、口調だけは少し柔らかい。

「えっとね……ケンカはダメだよ」

「仲良くしよーよ……ね？」

先程の不穏な空気を間に受けてしまったらしく、どこか悲しそうな四つの目がユレアに請う。

「ええ。わかってる」

それは双子の意を汲んだ答えなのか、主に今さっき言われたからなのか。

「じゃ、約束！」

「約束！」

双子が突き出した小指に両手で答えて指きりをした。

「……さて、戯れはこの辺りでいいか？」

それぞれの様子を眺めていた仮面の男がそう告げる。皆が話を止め、彼の言葉を待った。

「では、行くとするか」

パチン、と指を鳴らす。同時。村が“消失”した。

まるでそこにははじめから何も無かったかのように家屋や火葬され

た者達の灰までもが消え、何もない原っぱへとその姿を変えた
否、戻した。

「次はどちらへ？」

「そうだな。“時紡ぎの魔女”も見ておきたい」

「了解しました……クオン様」

その台詞を最後に六人は歩き始めた。

消えた村跡に風に揺れる、赤い手向けの華だけを残して。

少年と死神

それは、今は遠い幼き頃の記憶　。

少女は泣いていた。

村はずれの小高い丘。宿を飛び出した少女が偶然見つけた場所で、村からそう遠くはないけれど、誰もいなくて静かな場所。少女はその場所で独り、泣いていた。

少女は怯えていた。漠然と自分に押し掛かる未来に。己の両肩に覆いかぶさる人々の期待、希望、憧憬その他畏怖と尊敬と願望を織り交ぜた祈りが怖くて仕方が無かった。どうして自分にそんな目が向けられるのを少女はよくわかっていた。ほんの数カ月前までは自分もただ祈るだけの人々の側に居ただけだから。だが。実際に自分自身がその役目を負う事になって初めて、自身の想いが如何にその当人を苦しめるのかを知った。

けれど、逃げられない。それをわかっていたから、少女は独り、この場所で泣いていた。誰もいないとわかっているにもかかわらず、涙の痕を残さないよう必死に隠しながら。

「何をしているんだい？」

と、少女の背後から人の影が伸びてくる。突然現れた影と声に少女は悲鳴を上げる事も忘れて思わず飛び退き　　転んだ。

「あ、ごめんなさい。えっと、大丈夫？」

それは少女とそう変わらない背格好の少年であった。村の人ではない事はその漆黒の上等な生地を使った衣服を見ればわかった。村の子供はもっと動きやすそうに汚れても構わなそうなものを率先して

着せられていたから。少女が咄嗟にそんな事を思うのは、羨望の眼差しが宿の窓から村の情景を覗いていたからだ。そんな彼女の想いの中で、彼はどうにもちぐはぐだ。

「な、何ですか貴方は。何者です!？」

目尻に残る涙を強引に拭って、毅然とした態度で少年に相對する少女。それが虚勢である事は誰の目にも明らかだったが、少年は恭しく一礼を返し、笑顔で言った。

「これは失礼しました。僕はチアキ・ヴェソル・ウィジャ。ウィジャ家の嫡男です。チアキとお呼びください」

「え？ 貴方が……」

名乗りを上げた少年に思わぬ反応を示した少女は、しまったと言わんばかりに自分の口を両手で塞ぐ。この場所は彼女にとって独りで独りの少女で居られる唯一の場所だった。だから、相手の名前に聞き覚えがあってもそれを言ってしまったら、また少女の居場所はなくなる、そう思ったのだ。

そんな彼女の事情を知ってか知らずか、少年は少女の行動を怪しまず、丘から覗く森と村の風景を眺めながら口を開く。

「いい場所ですね。ここは。静かで、風も心なしか柔らかい」

「そ、そうね……」

追及が無かった事を良しとし、少女は少年の話に合わせた返答をした。頭の中では、自分の正体がバレていないか、先程までの泣き顔

を見られていないか、そればかりが気にかかっていた、というのが事実だが。

「ですが、そろそろ日が暮れます。村からそう遠くはないとはいえ、少しばかり森を歩かないといけない。暗くなる前に帰った方がいいと思うけれど」

「あ、貴方が帰ったらね」

少年がどうしてこの場所に来たのかは謎だが、もし一緒に村に帰った時に教会の人や従者などに会ったら素性が割れて、この場所も知られてしまいかもしれない。それだけは絶対に避けたかった。

「それは困る……僕はもう少しこの場所に居ないといけない。だから、先に帰った方がいい」

しかし、少年は少女の思惑通りには動いてくれない。けれど、彼がしばらくここに居る用事があるというなら、早々に帰った方がいいか。そう思った、矢先。

「それじゃ、私は帰るわ。ええと、チアキ、だったわね。貴方も早くここから」

台詞の続きを、少女は忘れてしまった。音もなく、突如として現れた“それ”のせいだ。

彼女も話には聞いていたが、実物を見るのははじめてだった。それは少年の背後で、無機質な目を彼に向けながら、木々程もあろうかという大きな身体を浮かせていた。

「ひっ
「…」

「おや、これは……困ったな」

人骨のような頭部。その下は黒紫色の霧のようなものに覆われ、そこから人間の骨と思われる両腕がだらんと伸びていた。足はないが、代わりとでも言うように背中からさらに二つの腕、計四本の腕がそれにはあった。

死神。そう少女は思った。まるで本の中に出てくる死神そのものにそれは見えた。

腰を抜かし、地面に座り込んでしまう少女を余所に、少年はそんな異質な存在を目の当たりにしても、先程までと変わった様子を見せない。ただ少しだけ考えるように小首をかしげている程度だ。

「えっと君、早く逃げた方がいい」

「に、逃げるって言うても……」

少年はそう言うが、少女は既に全身が恐怖に震えて指一本動かさずにいた。言葉を喋れたのが奇跡だったくらいだ。

「……仕方ないな」

死神が咆哮を上げる。少女はもう生きた心地がしていなかった。フェルは人を襲う、化物。それは地震や雷等の自然災害と同じで、あってしまっっては人間にどうにもできない相手だと、そう教えられてきたからである。

だが、少年は違った。そんな天災を前にしても平然として、自分の何倍もの大きさを誇る死神をジッと見つめていた。

「大丈夫。僕が守るから」

少年の言葉を皮切りに、フェルの四本の腕が、少年を捉えんと動き出す。突き出された手が地面を砕き砂塵を巻き上げた光景を最後に少女は目を瞑った。

耳を塞いでも、死神の咆哮が響き渡る。自分が消えてしまうように縮こまる少女。怖くて怖くて何も考えられなくなる。少女は祈ろうとした。だが、そこに祈るべき存在は居なかった。何故なら、その役目は、祈られるのは自分自身とされてしまったから。絶望する。縋るものがないというのはこんなにも寂しくて恐ろしいものなのだと。少女は改めて実感した。

「デイドロデクト」

そんな中。少女の耳にはつきりと、少年のそんな呟きが聞えた。意味のわからない単語。発音も聞きなれないその言葉。だが、その響きはどこか彼女を安堵させた。

同時、先程よりも一際大きな轟音と突風が巻き起こった。座り込んだままでそれに耐える少女。風が止んで少しすると、少女はもう、死神の叫び声が聞こえなくなっていることに気づき、恐る恐る目を開けた。

「大丈夫？」

「わっ、わわっ！」

視界に入りこんだのは少年の黒い双眸。驚いて悲鳴をあげながら立ち上がって距離を取る。

「ぶ、無礼者！ 私を驚かすなんてどういっても、り……」

「よかった。立てるみたいだね」

朗らかに笑う少年。呆気に取られ、辺りを見回す少女。そこに、先程まで居た筈の死神の姿はない。

「あ、あれ……さっきのは……」

「安心して。もういないから」

少年のその言葉に少女は再びへたり込んでしまう。

「もしかして、貴方が」

「うん、そう。本当は人が気付かない内に済ませるように言われてたんだけど、参ったな、見られちゃったね」

信じられない気持ちで少女は少年を見上げた。黒くて綺麗な髪に同じ色の瞳。珍しい色だが、自分と歳も変わらなそうな少年が、先程の化物と戦った事は簡単に頷けない。けれど、でなければ自分は今生きていないだろう。先程の事を夢だと思うには流石に都合が良過ぎる。

「んーと、この事は秘密にしておいてくれなかな？」

困惑する彼女を余所に少年は何やら話を進めていた。どうやら、少女と遭遇したのは偶然だったらしい。有り得ない状況なのに努めて普通の、それもどこか控えめな少年の言葉に少女は笑った。

「ええ、良いわよチアキ。その代わりに、私がここに居た事も秘密ね」

そう交換条件を出して約束を交わす。別にそんな事をわざわざ言わなくたって、彼が言うようには思えなかったが念の為だ。

「さ、帰りましょ。暗くなると危ないんでしょ」

先程の恐怖はどこへやら、少女は軽い足取りで先を進む。と、ふと思いついたように少年の方へ振り向いた。

「そういえば、さっきの言葉、なに？」

絶望の中でも確かに聞えた少年の言葉。それが気になっていた。

「さっきの？」

「ディ………なんとか」

ああ、と得心がいったように少年が頷く。

「ディロデクト。古い言葉で“護りたまえ”って意味なんだってさ。詠唱だよ」

「ディロデクト（護りたまえ）、か。いい言葉ね」

気に行ったようにその詠唱を反芻する少女。そんな彼女に少年もまた質問を投げかける。

「あ、そういえば君の名前、聞いてなかったんだけど」

「えっと………そうね、アノって呼びなさい」

「そっね、って名前じゃないの？」

「名前よ。いいから貴方は私をアノって呼ぶの。いい？ わかった
？」

「わかったよ、アノ」

それが、アーノイスとチアキという少年の出会いだった。

世鍵 アヴェンシス

「……ここは」

アーノイスは目を覚ました。写るのは先程までずっと見ていた馬車の幌ではなく、白に複雑な文様が施された部屋の天井。なんて事はない。今はもう慣れ親しんだ、現在の鍵乙女アーノイスの部屋だった。全体的に白く清潔感のある色調の部屋で、床は紺色のカーペット。その他今彼女が横になっているベッド、クローゼット、一組のテーブルとチェアが完備され、生活には困らないが簡素な部屋であった。それもその筈。鍵乙女は一年の殆どを世界の門を周る旅を続けている為、この部屋で寝起きする事はそうない。

「いつの間に着いたのかしら……」

部屋の窓から外を眺める。空は青く日が高い。眼下には広大な街が広がっていた。セパンタのような乱雑な巨大さではなく、整備された道に整頓されたように立ち並ぶ建物。建物自体も四角く整えられている。

アヴェンシス教会総本山。自治都市アヴェンシス。アヴェンシス教会が最初に建てられた場所で、千年の月日の中で多くの人が集まり、自治をはじめたのが期限とされている。今となつては大国の首都並みの巨大さを誇る世界最大級の都市の一つだ。

アーノイスはその街の中心に位置する、城と見まごう程の大きさの始祖教会グロリアの最上階の一室に居た。そこは代々の鍵乙女が過ぐすとされている部屋で、当代の鍵乙女他は巫女と従盾騎士以外、立ち居る事の出来ない場所だ。無論、彼女がいない間の管理は修道女達がやっているのだろうが。

ここに来てしまった以上勝手には動けない。考えなしに教会の下に降りてしまえば、瞬間に信者に囲まれてしまうからだ。それを知らぬアーノイスではない。

ベッドの端に腰を下ろし、そのまま上半身を横に倒した。

「また、あんな夢……」

先程まで繰り広げられていた過去の鮮明な光景を思い返す。もう、記憶の中でしか会う事のない少年。

「……デイドロデクト」

彼に教えてもらった古い言葉。そして。

『護ってくれるって、言ったのにー!』

彼を思い出す度に脳裏にリフレインする、幼き日の自分が泣き叫ぶ声。アーノイスは横になったままでその声を振り払おうと頭を振った。

「デイドロデクト。ウィジャ家の扱う霊呪術で、霊力を極限まで凝縮、定着させる事によって他の物理、霊力問わず障断する光と為す。維持には多大な霊力消費が掛かり、術を発祥した当家ですら扱える者は少なかったという……だったかな」

そんな彼女の横に、いつの間にか金髪の童女が居た。ぶかぶかの白衣に身を包み、首からは教会のタウ十字のネックレスを首から下げている。何かを思い出すように指を顎に当てて斜め上を眺めていた。

「め、メルシアっ！ いつから居たのよ！」

その存在に全く気が付かなかったアーノイスはベッドから飛び起きると、その少女　メルシアの前に仁王立ちして睨みつける。

「なんだよー。烙印術使って目が覚めない鍵乙女を看病して上げてたのにー」

だがメルシアはそれに驚くでもなく頬を膨らませて臍を曲げた。

「あ、ああ……えっと、ごめんなさい」

「うむ。わかればよろしい」

アーノイスの謝罪の言葉に、尊大に胸を張る少女。既に成年間近の女性が年端も行かない少女へ、素直に頭を下げているというのはなんとも珍妙な光景ではあるが、それも致し方のない事。

それは鍵乙女、従盾騎士そして巫女しか立ち寄る事の出来ないこの部屋に居る事もそうだ。

鍵乙女アーノイス、従盾騎士オルヴスそして巫女であるのが彼女、メルシアだ。

巫女は鍵乙女の補佐、世話役としての役職、というのが名目だが、それは建前。メルシア本人は基本アヴェンシスを離れない上に、教会発足して以降、巫女となったのはメルシアのみだからだ。『巫女メルシアは千年の時を生きる魔女』と、教会は公表していないが、噂話は世界に知れ渡っている。事実、彼女の知識の量は尋常ではなく、教会の最高議会である審判団ですら知りえない事を“記憶”している。

一節には初代鍵乙女の旅路にも加わっていた仲間だとも言われ、世界の行く末を見守っている、と言われているが、真実は定かではな

い。

「呼吸脈拍霊波動に異常無し、と。問題なしだね」

アーノイスが寝ている間に検査術をかけたのか、そう言って部屋の出口まで行くメルシア。

「もう動き周っても大丈夫だよ。私は研究室に戻るから。何かあったら読んでね。それじゃっ」

「あ、待ってメルシア」

アーノイスの呼びかけも時既に遅く、メルシアは光に包まれて部屋から完全に消えてしまう。瞬間移動。彼女が自ら術式を組み上げて作り出した霊呪術の一つだ。巫女はいつも始祖教会地下にあるという通称研究室にて、世界中の文献などを読み漁っては、新たな術をつくりだす研究に没頭している。

「あー、もう」

溜息を吐き、眉尻を下げるアーノイス。だが、ここに居てもやることはない。教会に呼び出された理由をメルシアから聞いたが、当人は教会地下。鍵乙女でも瞬間移動の術は知らない。

「オルヴス……どこに居るかしらね」

いつもいつも側にいるが、巫女が居たからか、彼女の従者の姿は見えない。

最低でも街の中にはいるだろうから、彼女がここで彼の名前を叫べばすぐに飛んでくるのだろう、が。

アーノイスはそれをせず、自分の足で部屋を出て行った。用はある、が今は旅の時とは違い安全な教会内。加えて緊急でもないのに彼に足を運ばせるのは気が引けたのだ。

鍵乙女の部屋は教会の最上階に位置しており、部屋を出てすぐ長い螺旋階段が続く。一つの小さな塔を下りたかと思うくらいに階段を下ってようやく、広い廊下に出る事が出来る。

とはいえここも基本的に立ち入りが許されているのは大司祭クラスの人間で、今はオルヴスが使う従盾騎士用の部屋とまるで使われていない巫女の部屋、そして禁書が保管されているという巨大な書庫しかない。書庫にアーノイス自身入った事がないのでわからないが、

そんなわけで、その階で唯一入った事のあるオルヴスの部屋の扉をノックする。

二回。無音の廊下にノックの音が虚しく響き渡るが、中の部屋からは返事がない。まあ、オルヴスが中に入れば部屋の扉に触れる前に気配を察知して出てくるのだから、ノックが出来た時点でアーノイスは期待していなかった。

「んー……街中行っちゃったかしらね……」

彼の事だから、大方旅の準備を整えているのかもしれない。もしくはグリムに突き纏われて災害という名の訓練を修練場で繰り広げている可能性もある。従盾騎士という立場なのだがどうにも教会の教えに熱心というわけでもない、とアーノイスは見ている事から、礼拝堂もないだろう。

「修練場、行きますか……」

若干気落ちした声でそう呟く。本当はこの部屋、もしくはせめてこの階に居てくれればよかったのだが、ここから下にいくとなると、下に進む程人と会う事が多くなる。となれば、そこにいるのは敬遠なる信者達で、まさに聖書の体現者たる鍵乙女はすれ違う人見かける人全てから声をかけられてしまう。それが、アーノイスは未だに苦手だった。元々王族であるのだから、周囲からの視線は慣れている筈、と彼女自身思っていたが、こればかりはどうにもならない事だった。

再度軽い溜息を吐き、階段を下っていくアーノイスだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360u/>

白月に涙叫を

2011年10月28日10時08分発行